



春城淡菘鷄助
大正十年
十月

40

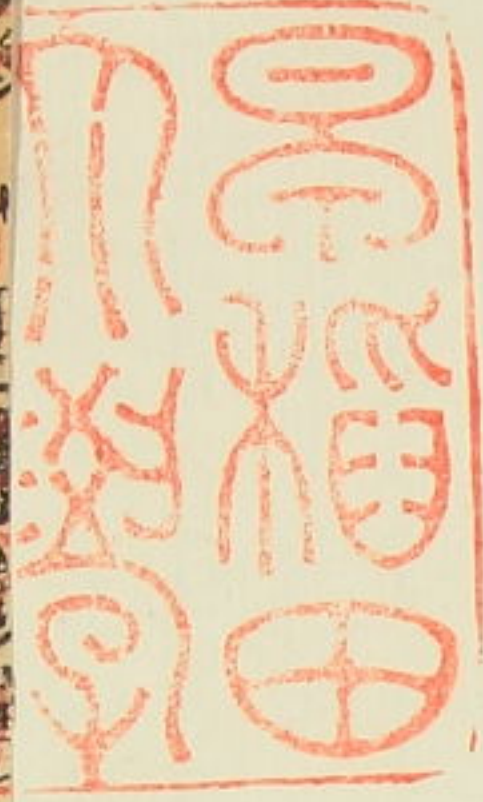
特別
14
1919
389



門 14
號 1919
卷 40

門 15
號 1380
卷 40

昭和十六年十一月五日
市島謙吉氏贈



雙魚堂主人

石黒と長谷川 (上)

◎長谷川泰氏は杏林の變物である。本郷に住し多くの土地を擁しながら、人に對しては口癖の如く自ら「本郷のタチンボウだ」と云ふ。すると或時氏と如怨の間柄なる石黒男が長谷川氏に向つて曰く、君は曾て張飛の渾名があつたから我輩は「蝶飛居士」の印を刻して贈つたが、近來君また自ら「タチンボウ」と云ふからには別に一印なかる可らずと思ふて昨今彫刻中だが、其字は「多珍房之印」と云ふのだとの話。蓋長谷川氏の書齋に多く異様の品を陳列するに云ふと云ふとである。

○石黒、長谷川の兩氏對座して互ひに書生時代の事を語るを聞けば、長「ドウダイ稲荷鮓の立喰をして芳原へ繰込んだ時は……」石「イヤそれよりも龜井戸の橋本近邊で慈姑の申さしを喰つたときは……」と云ふ。そこで兩氏が我輩に語つた處に依ると、兩人して騎馬で龜井戸へ遊んだ時、頗る空腹を覺えたので、ある茶店へ立寄り、穩しから二三錢の錢を投じて慈姑を買ふと云へば店の老婆心得たりと二串計り持出し、馬に喰はせやうとするのを、ドッコイそれば馬の食料ではない、主人公の午飯だと云つて慌て、馬の口から奪ひ取つたと云ふ罪のない話である。



早稲日大學 圖書會



雙魚堂主人談

石黒と長谷川 (下)

○先年我輩が佐渡に遊びし時、赤泊禪長寺住職久間象山獄中の作『よの中の霧のしるしか武蔵野や、大江のみ戸に霧たちわたる』一片に、石黒男爵の跋をもどめ遣はすべしとを約し、其後右跋文を請ひ受けたるにつき本書と共に佐渡へ郵送した。其跋文の寫しは如左
郷友○○○君塵紙に歌一首を書し

たる一片紙を示して曰此を知るかと余一見愕て襟を正して曰此象山先生獄中の歌にして先生の筆蹟たる疑なし君此を何處にか得たる君曰果せるかな君の此言ある其由来を語らざる可らず余去年佐渡に遊ぶや赤泊町禪長寺住職某此を携來て其由来を告て曰先住名は興長なる者嘗て江戸愛宕山福寺に住した時其法弟興和を介し寺僕金彌なる者より之を得たり金彌元江戸傳馬町牢獄に番下たり時恰も象山先生吉田松陰の事に坐し下されて其獄に在り常に金彌の質直を知り竊に彼に筆墨を借て所感を録す金彌其一片を乞ふて珍襲するもの此也後年金彌之を興和に譲り後興和之を興長に致し興長禪長寺に住するや傳て今に至れるなりとて余に跋せんことを乞ふ 是余以爲く君親く象山先生を知る此に跋する君に若く者なしと更に携來て君に跋を乞ふ也と

回顧すれば今を距る四十六年前余年十九文久三年癸亥春日先生を信州松代の幽居に訪ひ教を受くる僅に數日然れども先生の余を視る數年及門の弟子より厚く余の先生を景仰すると亦數年及門の諸子より深し當時手寫せし先生著省佩録を披閱するに愛思世事五首の第三に此歌あり五十年前我國運否塞の時に際し先生明大の見識を愛ると實に深く自悔以て安を儻に忍びず身を以て國に殉し我國開進の基を開き遂に今日の隆運を致したる先生の功實に偉なり然ども當時獄に投せられ一片の帗尙之を得ること能はず固に用ふる紙を竊みて僅に所感を書するに至る以て其辛苦惟ふ可きなり此に謹て所感を録して○○君に返し永く禪長寺に珍藏せし



(禁傳載) 雙魚堂主人

長田秋濤と語る (三)

◎帶勤者はモデル

長田と云ふ男も伊藤公などに随従して、度々外國の宮庭へ往つた事がある、随つて勳章も四つや五つは有て居るそうだが然るに前の話を聞いた時「君でも勳章を佩用することがあるか」と聞いたたら、外國へ行くと場合により佩用する、ナゼなれば勳章を佩用して居るとモデルからだ、例へば停車場などへ行くと驛員の取扱が違ふ位なものだ、日本程勳章に對して冷淡な處はない、それだから日本では勳章を佩用することがない、と云ふのは表向で、實は一つも届けて無いから佩用が出来ないのじゃ、今では勳章は皆などこへ行つたか一つも無いと云ふて居つた長田の眞價は此邊に存するのであらう。

◎教室でノロケル

秋濤は早稻田大學の教室で、生徒に日課を授けつゝ、往々情婦の「ノロケ」を云ふた事がある、秋濤と云ふ男は實に亂暴極まる。併し生徒にノロケを云ふて、生徒の排斥を受けないのは恐らく昔より少なからう、此處秋濤なかく「エライと云ふてよろしい。秋濤は成嶋柳北の一族で柳北は大叔父に當つて居るさうだ、秋濤の彼れがごときは、長く佛國に居つて其の風化を受けた爲めばかりではない、實は柳北の血を多少混じて居るので、家傳と云ふてよろしいのじゃ。

意外録

(三)

東京 春城學人談

樹生筆記

どや

大阪の天王寺に俗にどやといふ古き習儀がある、これは一月十四日に行ふ年中行事で、一年の豊凶を卜するため屈強な男が数百人東西に立分れて何れも裸体で渾身の力を籠め、互ひに尻と尻とを押し合ひ、一歩にても押し出た方を吉とするので審判官様のものが立合つて居る、又東西の別け方は、同寺の東門以東を東方と定め、其の以西を西方とし、東西より押し合ふ中に立て居るものを柱と唱へ、東西共に村角紙に名ある力十四五名づつこれをつとむることになつて居る、當日の混雜は非常のもので、大いに賑つたものである、曰分は現にこれを見たことがあるが今は如何か知らず。

意外な女

福岡に意外な女流が出た、それは高橋蘭と云ふ婦人である、此婦人幼少

より漢學を修め、漸やく進むに伴つて思想感情共に全く男子的態度に變じ、終には良人と離縁し、髪を斷り男裝して男子と交はり、好んで國事を談じた、玄洋社で向陽義塾を設けた時には、この婦人を塾長に仰いだ、女史は史記の項羽本紀や刺客傳を専ら講述し、盛んに福岡青年の志氣を鼓舞した、頭山滿なども其の感化を受けた一人である。

俠骨伯麟

幕末に江戸の貧民糊口に窮したるを不憫に思ひ、講談師神田伯麟本所表の枳寺に土蔵を築き、粥を炊き、貧民に振舞つた、其折伯麟吾妻橋の佐竹家へ出かけ、玄關先きで執事に面會し、貧民の窮狀を訴へ、自分共ですら應分の救助をなす折から、是非飯米の寄進に預りたいと談判したが、執事は應ぜざるのみか、終には叱り飛ばしたので、伯麟も憤然として遠かに講談調子となり「抑々當家は新羅三郎義光の後胤」と先づ佐竹家の系圖より説き出し「佐兵衛佐義政の失政」に及び、追々佐竹騒動に

近衛公と都々一

近衛公(篤慶)は雅號を霞山と云はれた、公或る時云はるに、世間には自分と同名が多くて困る、尤も閉口するは都々一など作る者に同名のものが往々あるのだ、此頃も少年時代に霞山と云ふものと都々一が出て居つた、華族學校の生徒はそれを自分と思つた、校長も都々一を作るとか耳語するを聞いたと一笑を漏さされた、其頃公は華族學校の校長であつた。

永坂石埭の料理通

永坂石埭は醫家と云ふよりは詩人として聞えた人で、絶句では支那にあればどの者は無いと云はれて居る、此人に意外なるは大の支那料理通で勿論自分自身で料理をやるのだが、例の倍樂園やその他の支那料理店よりも遙かに巧者である、漢詩人であるから當然その趣味がある様なもの、斯る心得のある人は日本には誠に少ない。

岩崎家の鶏肉

岩崎家の日本第一富豪であることは、云ふまでも無いが、その主人八彌男は如何にも謙遜洒落の人で、其の周圍を取り巻く番頭格の人よりも食かに接し易く、接して見ると如何にも愉快に感ずる、これも或は意外と云へるかも知れぬ、しかしこゝに意外ならぬ意外ともいふべきは、岩崎家の養鶏の法が如何にも贅澤であることだ、千葉縣に同家の養鶏所がある、そこに飼養する鶏は一切半乳ばかり飲ませて飼養する、随つて其肉が著しく軟かで味がよく、都下の如何なる鳥屋もこれには到底及ばぬ。

意外録

(三)

東京 春城學人談

樹生筆記

戲號三幅對

昔し死んだまねして葬式まで営ませいざ讀經といふ段になると、笑つて棺桶より躍り出で、尸主を驚かした人、山崎北華は捨樂齋と號したが、文學者の内に自劣亭と號して居る橋田案がある、いつぞや坪内逍遙園遊會に、門人連いるく意外な習匠を凝らして人を笑はせたが、其時鳩月抱月が四阿に掛けた鍋蓋の額に抱月亭と書いてあつた、「ホウゲテイ」と讀むのではなく「だきつきてい」と讀ませるのであつた。

藩札狂

大阪府下で神話に關聯ある萬の葉驛

信太の森附近に前田惇と云ふ人があつた、此人は自分も熟知であるが、三十餘年來、あらゆる藩札を集めて見んと思ひ立ち、札とし云へる札は幾んど網羅して、今は八千種にも達し自ら藩札狂と稱し、名刺にも此の三字を附して居る位である、嘗つて此人を訪ふて全部を一覽したことがあつた、中には随分意外の意匠を凝らしたのもあつた、一二を言へば、因伯通寶といふ札には、雞の血を混じらした繪の具が用ひてあり、淡路の札の用紙は眞綿が漉き込みあり、肥前佐賀の藏屋敷發行のものは字がすかしてあり、松江のは松葉がすかしてあり、宇佐より發行したる者には矢と鳩の模様があり、十佐のは鯨が書かれてあつた、薩摩の札には早財所といふ堅くるしき發行所が署してあり、いふ堅くるしき發行所が署してあり、明治年間發行の札の中には有栖川御

願所と云ふ署名のあるのも見受け
た、博多の京都御館屋と云ふ百萬持
者より發行した私札などはなか／＼
贅澤な音匠を凝らしてあつた、此人
がこれほどの審札をあつめるには、
全國の紙屑屋を一時限なく應訪した
と云ふ、又蒐集の方便として一時巡
査の志願をしたこともあつたと云
て居る。

悪縁深處

東京の某待合に「悪縁深處」と書した
額が掛つて居る、伊東長亭(巳代治)
の筆である、此の樓の女將は意外の
筆を云ふて笑はせた、伊東さんは堅
犬養さんは横で云ふ、何んの事
かと思ふと、兩人と二人の妾を一
家に蓄へておるが、伊東は三階と併
下に置き、自分は二階に居り、木下
は左右兩室に置くから、堅犬養と
はせる。

共に足利の有志に招かれて往つたこ
とがある、其時、釋奠の季節では無
かつた、併し公園に盛んな設備があ
つて、大隈侯は例の雄辯を揮はれた、
其夜自分の旅宿に土地の有志が多く
習し、自分に何か足利に對する意見
を陳べよと請ふから、自分は、足利
學校は、今では此祭の本家本元で名
物として誇れる、然るに其祭を聖堂
の狭い所でやつて、誰れも参列の出
來ぬのは、折角の名物を没却する様
なものである、宜しく町祭として常
日は町内一同休業して盛んに遣ふべ
しと云ふ様な事を云ふた、これが足
利の重なる人々の氣に喰つたと見
えて、其年の十二月廿五日間近にな
ると、足利から迎へが来た、貴君の
言はれた通り町會の決議で釋奠を町
祭としたから、是非來て一壇の講演
を遣つて呉れと言はれたには意外に
感じた、大隈侯の雄辯よりも自分の
駁辯の方が機能が有る譯になる、自
分は招きに應じ、吉田東伍博士と共
に出かけたが、行つて見ると成程市
中到處國旗を掲げ、町内大賑かて
あつたので、ひどく愉快を覺えた。

意外録

東京 春城學人談
樹生筆記

林下に筆硯

春木南湖、上州遊歴中、途中路を遮
るものあり、皆な破れて垢じみた衣
類を着け、半裸体のものばかり、矢
庭に監輿に乗れと云ふ、南湖山賊に
襲はれたと氣づきしも詮方なく、云
ふに任せて昇れて行くに、林中に入
りて監輿を卸した、四鴻を見れば意
外にもここに龜木ながら毛氈を敷き
筆硯の設けがある、昇夫等皆頭を低
れ、吾等馬夫輿卒の徒である、先生
の盛名を聞けども潤筆の資もなく、
又先生に畫を請ふ傳手もない者であ
ります、失禮ながら御揮毫を乞は
ぬめ斯くの通りと、謝し且つ請ふに
仕せて南湖も漸く安心して幾枚か畫
を作つて與へた、彼等も喜ぶむで監
輿に乗せて旅宿まで送つたと云ふ、
南湖終身の奇談だとして、しばし人
に語つたと云ふ、現に南湖の畫きた
る林中揮毫の圖もあるそうだ、上州

次に畫の求め方が馬賊的であるのも
妙だ。

和讚の研究

幸田露伴は常に意外な思ひつきのあ
る人だ、いづぞや訪ねた折は、御和
讚の研究を遣つて居ると云ふ事で、
其の蒐集された百餘の異たいろ／＼
の和讚を示されたが、よくも手に入
つたものと一驚を喫した、この類の
ものは澤山あるにしても、一枚摺の
片々な物で、古いものは多く紙屑に
なつて仕舞つて居る筈であるのに、
よく寄せたものである、露伴の言ふ
所に據ると、折角集めて見たが、失
望した、其譯はどれを見ても皆七十
調で特徴のあるものは一二を除く外
無つたと語つた、和讚は一種の宗教
歌であるけれども、我邦のは多く愚
夫愚婦に誑はせるものだけに型も極
まつて居り、内容もつまらない者だ、
それを熱心に集めた所、露伴の凝り
屋たる處か。

釋奠を町祭とす

足利の足利學校では、十二月廿五日
昔し通り孔子の祭釋奠を行つて居る
會て七八年前、大隈侯や支那公使上

意外録

東京 春城學人談
樹生筆記

久米博士と理財

分は黨の事務所にかへり、吾黨の領
袖も少しく板垣伯に倣ふべしと注意
した事があつた。

久米博士は實に綱領家に取つて二人
とない大切の勲定奉行である、曾つ
ては財務理事と云ふ様な職に在られ
たこともあり、今尚ほ其方面の顧問
となつて居らると、一体此人は明治
の初年に早く暗殺會社を起し、今も
坑に其經營を續けて居らるゝ程であ
るから、經濟思想のあることは申す
までも無いが、博士を知らぬ者は皆
意外に思ふて居る。

困ると仰せられ、其後は餘り宮中へお召にならなかつたと云ふ。

意外録

(元)

東京 春城學人談
樹生筆記

▲墓所の懇親會

長崎では死者に對する禮が非常に厚い、長崎程立派な墓のある處はない、一家の内、大切な人が死ぬと墓を造る爲めに身代の半分位を傾ける程立派な墓を建てるのが習となつて居る、自分も先年長崎でいろいろの墓を訪ふて見たが、如何にも堂々たる墓が多く、随つて墓地も廣く劃してある、扱て爰に意外なのは中元になる一族酒食を齎らして墓地へ出掛け、墓前に盛宴を張る事である、無論各戸皆同様のことをするから、墓地の賑ひは一大園遊會の如き觀を爲す或は隣り合ふ墓地の家族が互ひに往來し献酬をするから、懇親會の様でもある、此風俗は往年コレ流行から止むだが、併し中元に互ひに提燈

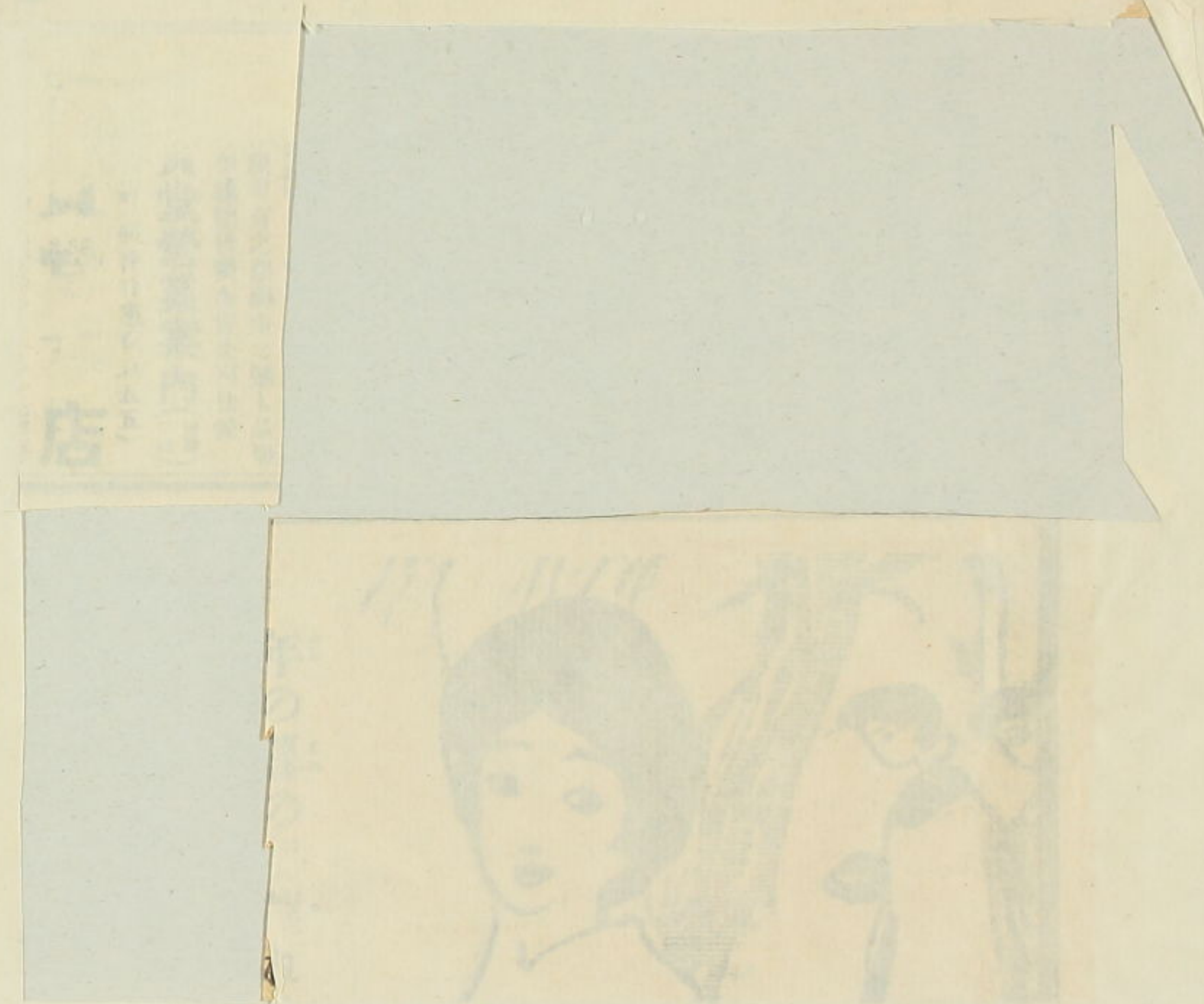
▲意外な畫讚

畫讚は大抵畫の趣をあらはすため若くは畫を褒めて書くのが通例であるが、茲に畫師を罵倒しながら畫を褒めた意外の例がある、それは頼山陽であるが、山陽でなければこの遺口は一寸出来ぬ、曾つて京都の大丸の所藏に係る横物一幅を見た、岸駒がアツサリ竹の横枝を書いたのに、山陽が讀して居る、山陽は平生岸駒を俗畫師と嘲けて居つたものだが、此の竹には流石内々敬服した、併し山陽は自分の地歩を保つ爲め意外な工風をした、それは狡猾にも竹を自己窓外の者であるのを、いつの間にか俗畫師に覗かれて、到頭寫されたと云ふゾルイ筆法を案じ、罵倒の間に感服を寓する一種意外の讀を題した、其詩は

吾家密竹玉參差、愛護何容俗眼窺。
何者畫師偷樣去、剗籐紙上看橫枝。

▲水戸よりも加賀

諸侯の内、大藏書家といへば誰れでも先づ指を水戸に屈する、水戸には藏書館と云ふがあり、大日本史の大著が編纂されたから、斯く考へるのも無理はない、併し水戸よりも遙かに大なる藏書家は加賀であつたことが近年明瞭になつた、水戸では義公の時から書物を集め始めたが、加賀では松雲侯が空前の圖書蒐集家であつた、此の兩侯は叔姪の間柄であつたから、水戸は始終加賀から書物を借りて間に合はせたものである、松雲侯は金を惜まらずあらゆる本を購ひ、若くは賸りせしめた、其數は實に夥しい者で、なか／＼水戸などの及ぶ所が無かつた、松雲侯は、自身餘程書物の鑑識も有つて、今日の所謂珍書をも自ら鑑かして集められた、百萬石の大藩で、金を惜まらず集めるのであるから、何んでも集つたに相違ない、當時朝廷でも幕府でも借り出し得なかつた公家の秘書を加賀文庫に借り出すことが出来た、これは全く金力のお蔭である、加賀に貸せば



必らずお釣りが澤山に來ると信ぜられたから、如何なる秘書も快よく貸した、加賀の返禮も又なか／＼盛んなものであつた、西三條家の記録を借りた返禮に、書庫を作つて遣つたのみでなく、それが縁となつて結婚まで遣つて居る、東大寺の文書借り出した返禮に、幾千通と云ふ一切の文書を立派に巻物に仕立て百箱に入れて返却に及んだなどは其一例である、古今松雲侯様多くの圖書を集めた者は日本に決して無い。

意外録 (三)

東京 春城學人談
樹生筆記

蝶の色彩研究

天才肌の藝術家は、どうかすると面倒な研究などをせぬものだが、それは褒める價のない天才である、和田英作と云ふ洋畫家の如きは感服すべき人だ、多年うき身を寝して居る、日本にあるとあらゆる蝶を二百幾十種と集めて、それ／＼の色彩の配合

を寫眞に取つて研究をして居る、なか／＼苦心の事である、いつぞや其の澤山なる研究の結果を見たことがあつた、實に容易ならぬことと感じた、和田氏の云ふ處によると、自然といふものは實に偉いものだ、人間か今までの色とあの色と互ひに差し合うとして其の取り合せを嫌つて居るものは、蝶に於ても自然にその通りで、決して差し合つた色が互ひ

に相接して居る様子は無いと語つた、唯だ人間の工風以上の色が蝶にあるのは、自然に學ぶべき大切な點であると言ひ、その際特に或る蝶の三四の色を按分比例で取つて汽車の圖を作り、それに色どつて示された、兎角藝術家も自然に則らなければ、一頭地を擧げるわけにゆかぬ。

蝶飛居士

片貝の大塚氏に意外の帳面がある筈だ、それは石黒男爵のある時代に大塚家の帳面に座つてツケられたものである、石黒男は、なか／＼多量の人で、篆刻も出来ると思える、男の

親友長谷川泰氏は、其性格から一時張飛の綽名を受けた、男は曾つて「蝶飛居士」の自刻の印を贈り、又泰君自身本郷の立ん坊と口癖に言たから、「多珍房」の印を刻して贈られたこともある。

大隈家の文書

大隈家には御維新前後に亘つて機密に關する手紙の復が頻繁にあつてそれが皆な保存されて居つた、これは維新前後の機密を語る大切な材料であるから侯爵の様な無難な人も此文書だけは棄てずに保存して置かれた、處が故人小野梓君が曾て侯爵の傳を作らんとし、其材料にと請ふて之を借受け非常な大切に幾年も其自宅に置いた者が、其量は大行李一杯もあると聞いた丈で小野君は餘りに大切にした爲め吾々懇親の者にすら曾て一通だに示さなかつた位である、然るに君が死すると同時に意外にも其行李が突然紛失した、其後如何に詮索しても出ぬ、今日に及んでも所在が分らぬ、侯爵は折に觸れ惜し居らるゝが、或は機密の

扱ひの鄭重を意味し、儼は價ひの廉なるを意味すると、迄はすらくと故手つけたが初「誤」の一字に至りハタと問へて漸つとこのこと一案を得、聲を低うして曰く「大勢込合ます時は前後することもありませんから御勘辨を願ふ」と云ふ意味だと意外の解を與へた。

意外録 (七)

東京 春城學人談
樹生筆記

貴重品の裏面は案外

近來書畫骨董が以外の高價で賣買がある、併し價の高いと云ふとは強ち意外でないかも知れぬ、然し爰に意外のことがある、それは世に貴い寶物とも云はるべき、若くばそれに準ずる程の物が今はいろ／＼の人の手に歸して居るが、實は其七八分通りは贓品であると、云ふたら誰れも案外に思ふだらうが事實さうであるから

館柳灣の故事附

東京の或饅屋に「温良恭儉讓」と云ふ鹿爪らしい五字額を掲げてゐる家があつた、館柳灣曾て友人と此屋へ登ると、友人が云ふには、此處うなぎ屋に没交渉の額を懸けて置くは馬鹿だと罵ると柳灣の云ふには、左様でない、温は蒲燒の温かきを意味し、良は肉の新鮮を意味し、恭は客の取

仕方が無い、全体今より一千年も前即ち天平頃の物などが矢鴉に一個人の手にあるべき筈のものでない、其源を尋ねて見ると、皆寺院の寶庫に在つた品で、それが紛れて世に出たものに外ならぬ、更に其紛れた原因を調べて見ると、多くは混亂時代に坊主や神主が草鞋錢にと云ふので内々之を東京に持出して賣飛ばしたり、或は又相當の奇者が胡魔化して取出したのが轉々して方々の珍蔵となつて居るが、實は寺社の寶財帳に載つて居つて信徒の同意を得るか官許を得るにあらざれば持出したり、賣却したりすることの出来ぬ者も其中に交つて居る、大名などの所藏品の中にもコノ類の者が動もすれば交つて居る、それも或は藩主の威力を以つて取り上げたなど云ふ歴史のあるものもあるかも知れぬ、併し大名のことは一切ここでは除外し主として維新勿々の混亂時代に紛れた者の中にどれほど盗み出されて方々の手に歸して居る寶物とも云ふべき者があるかも知れぬ、それが源を

尋ねて見ると、皆とは云はぬがなか
く少からず贗品であることは確か
である、勿論現在の持主が泥棒をし
たと云ふのでは無い、誤解があつて
は困る、唯だ茲には古代美術と云ふ
立派な品の後ろに忌はしき盗とか賊
とか云ふ來歴が潜むで居るのは案外
だと云ふに過ぎぬ。

尾藤二洲の素性

尾藤二洲は何人も知る寛政の大儒で
あるが、此人の素性を今迄船乗の子
として居る、少年の頃父に随つて船
に乗り、帆柱より落ちて足を挫き、
大より志を立てて片山北海の門に
入り遂に大儒となつたと云はれて居
る、然るにこれが漢文から来た間諜
であることが漸やく近頃分つた、一
体二洲の素性は伊豫の河の江の舊家
で其家は昔し庄屋を勤め五代目の人
が非常に有徳の所から、遂に廻船業
を初むるに至つた、それを頼春水が
父操舟を業とすと書たから直ちに船
頭と誤つたのである、實を云へば二
洲は金持の若輩那である、漢文から
往々案外の誤を傳へるは當に此の
一事に止まらぬ。

新聞史上の一奇蹟

森鷗外は伊澤蘭軒と云ふ醫者の傳を
大阪毎日、東京日々、二大新聞に三
百幾十回に渉つて連載し新聞社が内
實閉口して居るのを知らぬ顔に屈せ

坪内博士の本登り

道彦年内博士に就いて奇談がある
由美術家と云はれる者は作を
に、人にまれ、土地にまれ、テル
を要するもので、故人尾崎葉が金
色夜叉の貫一の死場所定むるに
苦心して能々鹽原まで掛けたと云
ふ話は誰れも知つて居るが、道彦博
士にも之と相似て而一段と意外の
話がある、博士は近年例の「彼の行
者」の脚本を著すに就て行者の居
所として幽霊窟を問ひ大樹を取合
はする爲めに大樹の探險の必要を感
じ熱海の公園の奥にある有名の大樹
を選たが、此脚本中には行者の使
居る妖怪が樹上を驅廻る場面が

あるので、こよに木に攀り上る必要
が起り人の助けも藉りず、嶮を冒し
て攀登り枝から枝へ傳はつて實地の
研究をしたなどは全く意外の事であ
る自分も曾て博士と此樹下に立ち其
話しを聞いて悚然とした事がある。

圖外の太三味線

明治八九年頃大阪から竹澤彌七と云
ふ三味線弾が東京へ来て東京の名人
連が皆一様に之に感倒されたと云ふ
話がある、當時の話を聴くに此界の
三味線は胴の大きさと一尺五六寸、撥
も亦之に準じ普通のものに比すると
三倍の大きさが有り婦人などは連
も持上げること出来ぬ位、之を彌
七が縦横に弾こなす手際は如何にも
人を驚ろかした、東京でも名人の鶴
澤勇造が負けぬ氣になつてそれと同
様の大三味線を造つて試みたが遂に
成功しなかつた、此大阪の三味
線は天折したから餘り世に聞か
ないが其時分版になつた錦繪は今位
傳つて居る。

ニコライ教堂の踏繪

昔日本で耶穌教を取締るために踏繪
と云ふものがあつて、信者か否かを
判する爲めに之を踏ましめたと云
ふ話も誰れも知つて居るが、愛之
酷似の意外の事實がある、駿河臺の
ニコライ會堂に洗禮室と云ふがあつ
て、此室の床板に佛敎名派の尊崇す
る彌陀佛、釋迦牟尼佛、大日如來な
などの像が浮彫になつて居つて信徒
にして平然として之を踏む者でなけ
れば、洗禮室へなはいといふと聞
いた之は全く踏繪の故智を襲ふたこ
とである、教堂では之を秘して置く
所、信者は知らぬ。

意外録

東京 春城學人談 樹生筆記

仁丹の廣告

大阪の如き俗地から薬師の廣告案と
して教訓の格言が採用されて居ると
云ふも意外である、二三年前から東
京市中の電柱などに盛んに格言を書
いた廣告が見へる、これが仁丹の廣

告である、自分の如きも市中を歩く
毎に此格言を讀んで歩くを例として
居るがどの電柱を見ても皆異つた語
が書いてあつて中には却々面白いの
がある、無論西洋の格言を譯したも
のだが之は善い思ひ付でして品の
よい廣告法である、其格言を讀んで
染々感ずると同時に仁丹といふ名も
其人の腦裡に刻まれる、先年仁丹の
主人森下博士と云ふ人に會たし時聞い
て見ると吉原とか洲崎とか云ふ惡所
には特に遊蕩客の讀んで慚愧する様
な格言が選んで出たと云ふこと
だが成る程朝歸りの遊客などが讀
たら一種の感に打たるとであらう、
それと同時に仁丹を記憶させると云
ふは流石に一種變つた思ひつきであ
る。

踏繪

▲櫻痴居士の姉
福地源一郎は、東京日々新聞の主筆として一世を風靡した者であるが、其姉は福地の名聲の籍貫たるを空吹く風と長崎で左利襪を取つて居つたなどはチト意外だ、此の姉は「文」と云ふて、つねに福地を「源一」と呼び棄にして居つたとは、長崎に居つた友人の話である。

▲敬字翁も亦之を爲すか
中村敬字翁は、誰れも知る篤行の人、文章などの代作を荷せぬにも人、依頼しそにも思はれぬが、意外にも石川彌太郎や龜谷省軒などに、頼りに頼んだ事が、兩家に存して居る件復、簡に歴々として現はれて居る夫人菊池晩香の話である、石川も龜谷も敬字の門人でない。

▲久原郎の捕蠅器
大阪の富豪久原房之助氏の住吉の邸は、三萬坪を越ゆる大規模のもので大谷光瑞郎が經營して後に、此人の有に歸した、二樂莊が其所在地の六甲山と共に園中の名となつて居り、邸内の杉林を貫通し、阪神電車が走つて居るといふ大規模の者だが、この位のことには此人に意外とするに足らぬ、却つて意外に思つたのは、庭園を散策して、到る處に捕蠅器の置かれてあるのを見た事が意外であつた、捕蠅器は碗の硝子製の、夏時どこの家にもあるのと同じもので、無論高價のものではないが、この廣い庭園の到る處に置てあつたのには一寸驚いた。

▲髭剃り道具を茶器と誤まる
近頃自分は安全剃刀でみづから髭を剃る慣れがつき、居室の架上にニッケル製の碗形の「シャボン浴器」と角の柄のついて居るシャボン刷毛が載せてある、一日地方の人が訪ひ來り居室に通つて、いろいろ骨董の事など談じた末、架上の此の二器を見て東京には此頃そんな茶碗や茶壺を立てますかと言はれて、何を云ふのかと架上を振り返つて見て、意外の誤解に一笑を發した。

▲片笠
抹茶用の茶壺は、昔二様あつた、即ち今用ひて居る柄の圓形になつて居ると、柄の中央より堅に半截した者と二様あつて、半截の者即片笠が茶を立てる時に用ひられ、丸笠は茶碗を掃除する時に用ひられた者であるが、今は片笠は全く絶え、掃除用の茶壺のみ残つて、それが茶を立てる用に使はれて居る、この事は餘り人が知らぬ様であるが、茶道の「オインリター」と言はれて居る上田秋成は之れを意外の事として書いて居る、家藏にも秋成の片笠の圖上に此事を題した一幅がある、又竹田の隨筆中にも録してある。

▲郷里には不人望
昔しからよく云ふ事だが聖人も其郷國では餘り持てぬものである、報徳社や斯民會などで尊崇する二宮尊徳翁でも其郷里に入つて事蹟を調べていふ所では、京都の婦人は人に肌を見らるゝことがひどく嫌で、此室も萬一の場合に逃げ込む爲めに出家して居るのだと云ふた。

頃か廣島に起り、碑文も此兩人の事を併せ誌して面しろく出來たのに、山陽を思む爲め此碑は永く建設に至らなかつた、山陽や古賀や二宮などを今で幾分郷里で尊む様になつたのは、皆な他郷で尊敬するから、其お付合をして居るのである、おのづから理窟のあることであるが亦意外と云へる。

六翁も語落一遍の人で無つたのであ

一六居士の周到

巖谷一六翁は才氣横溢の人で、詩でも書でも一向構思を費さずうまく出

豪傑の病氣

曲直瀬道三といふ名醫が、天正頃の

句佛

東本願寺法主大谷光演師に意外な隠

意外録

(三)

東京 春城學人談 樹生筆記

和田垣博士の細心

和田垣博士謙三の滑稽に長じて居

星亨の着眼

故人星亨は意外に先見の明のあつ

の人で、家庭に於ては自ら小遣帳を

故に終に果さずして歿したが、流石

結婚の神
雲大社が男女の結婚に大関係のあ
りなつて居る、結ぶの神といへ
は出雲の大社に祀られて居る神の事
と世間は極めて居る位だ、然るに此

神は、いくら研究しても月下氷
人と云ふ資格も因縁もない、なぜ出
雲の神を結婚に關係あるものと如く
したかと云ふに、近頃或る熱心なる
研究家が、尤もらしい事を云ふて居
る、日本で方々に幸の神といふがあ
る、それは性慾の神であることは争
はれぬ、男根女陰を祀つて居るのが
其の確證である、然るに昔し京都の
今出川といふ所に幸の神を祀つた處
があつて、一尚淺早のごとく繁昌し
たものである、而して其邊を總稱し
し出雲路といふた所から、終に後世
に雲國の大社の神をそれと思ひあや
まり、性慾に關する神とするに至つ
たのであらうといふ。

再度節
始めて神戸へ行つた時、市中を歩く
と交番所や辻に再度節といふ標札が
見えたが、町名だか何だか更に分ら
ぬ、筋は通りであるが、再度の文字
は町名らしくないので解し兼ねた、
或時神戸の知人に訊ねて見ると、矢
張り町名であると云ふ、神戸には再
度山といふ山があつて、昔し弘法大
師が二度登山したとかいふ傳説から
登山口に當る道筋を斯くいふと聞い
て見れば意外が意外で無くなつた。

意外録

東京 春城學人談
樹生筆記

再度節

兄弟姉妹互ひに相婚するより外に方
法が無い、越後も良人を兄と呼ぶは
古意の存するなりと、マサカそんな
譯でもあるまい、越後の人に問ふ。

意外録

東京 春城學人談
樹生筆記

頼山陽の香

山陽の意氣、文章から推測すると
豪放不羈で、酒など飲む時は門戸を
開放し、誰れでも酒いと極め込んだ
様に思ふのが寧ろ當然の様であるが
は反對で、山陽も京都式の大の
茶屋であつた、頼の驢駒と言へ
は誰れ知らぬ者の無い程の節儉家
で、酒の物は抵ね驢駒位な處で
済ました者と見へる、なか／＼門戸
開放か、酒を飲む時堅く門を鎖し
た位であると云ふ。

茶山の罵倒

山陽も青年時代歐を出奔して茶山の
塾に居つた頃は、いろ／＼厄介をか
けたが、京都に出て大家になると、
例の大言壯語が茶山には片腹痛く感
ぜられたと見へる、先年饗庭篁村よ
り自分に贈られた茶山が匿名で何

生殖慾と色慾

性慾問題が今西洋でエラク研究され
て居る、其の學問が「セクスナロジ
ー」と云はれて居る、爰に意外の事
のあるのは、西洋でも性慾的と云ふ
こと「イロテック」と云ふて居る、
色は世界共通のものか、また妙なこ
とがある、生殖と云ふと、人は直ち
に色とか戀とか云ふことを聯想する
が學術上から云ふとそれに違ひがあ
る、原始時代には生殖慾ばかりあつ
て色慾はない、禽獸などはある期節
に限り、生殖慾が本能的に起る、し
かしその期節にのみ限る、人間は文
明的動物であるからなかく、警澤で
期節が限られて居らぬ、それに戀だ

當流人名辭書

いつぞや幸田露伴は、意外の字書を
編纂した、それは人名が魚類の名に
なつて居る者や、草の名や、蟲の名
などになつて居る者やを多く集めて
考證を附したものであつた、中には
下男を權助、愚にして寛洪長者の風
ある者を甚六、河童を河太郎、大な
る登壇、遠州で山太郎、蛙を(中
で、我太郎、好かぬ者を(上方)で金
十郎など云ふ様なものもあつた様に記
憶する、意外な辭書である、一時い
ろ／＼の人名字書の出版流行のこと
があつた、兎もすれば藝娼妓の人名
字書まで出そうであつたのを露伴は
諷刺的に此の戲作を遣つたらしかつ
た、十把一束の人物を仰々しく銀杯
幾個拜受、勳何等何位などの傳を材
料とするよりも、此方が却つてお
もしろく且つ有益な辭書であると思
ふ。

徳川頼倫侯の號

紀州の城のある山は虎臥山と言れて居る、徳川頼倫侯此の山に因めるを、マサカ臥虎といふ名もつけ兼ね、去りて虎城もおもしろからずと、字典を案すること一年有餘に及んだところ、こゝに意外にも臥虎が一字になつて居る字を發見し爾來號を驚城と言はると、此臥冠りに虎は音をテイといふ。

江田嶋と能美嶋

古來阿波の國から淨瑠璃島の名人が輩出するのは有名な話だが之と似て而も奇なる嶋がある、此島では如くいなる者と雖も碁を達者に圍み、小兒輩でさへなかく侮り難い技倆を有つて居る、此嶋では初段位の腕前の者は箆で掃く程あつて此位の程度では大きな顔も出来ぬ位、だから古來此嶋から澤山の名人が出て居る、不思議にも此嶋は日清、日露の兩大戰で名高くなつた廣嶋縣で、海軍將

西洋人の下駄

下駄といふものが日本の專賣で、外國に無い様に大抵の人は思て居る、處が案外にも世界到處にある、曾て湯淺次郎といふ人が西洋へ行つて、態々各國のそれを集めて來て居る、西洋では田舎に入ると靴ばかりは穿かぬ、老人などの餘り窮屈のものや、昔まぬ向きの用として、又は泥濘地で穿くものとして農家などでは多く木で造つた下駄が用ひられて居る、具底には矢張り齒もある、唯異なる處は日本の必ず指と次の指の間に緒が挟まる様に出来て居るが、西洋には五指全部嵌る様になつて居る、これが異なる迄の事である。

本願寺と兼葎堂

近年に至り少しく手を入れた位である、然るにこゝに意外とも云ふべきは、青木昆陽先生の墓が彼地此地に立派に建てられて居る、昆陽は無論日本の文苑に重大な關係を有つて居る人で、其人物は偉い譯であるが、去りて此人は決して俗流に漏れぬ、知られて居る底の人ではない、寛政の三大儒を差置いて特に斯人の爲めに豊碑の建てらるゝは、意外であるが、扱て聽いて見ると、之は凡て例の燒宇屋の仕業であつた、即ち昆陽は甘蔞先生と稱名された人で、日本へ始めて甘蔞を移植したのは此人だからである。

字引附きの新聞

御維新前後に種々の新聞が發行されたが、多くは半紙を二枚に折つて十枚計り綴つた冊子であつた、無論今日から見れば幼稚の者である、茲に滑稽とも云ふべきは此種の新聞の中で、毎號附録に字引を添へた者がある、其新聞の名は一才忘れたが、其れは字引と共に現に早稲田大學の圖書館に藏してある、此字引は半紙を二ツ切にした程の小冊子で、本紙中の較

青木昆陽の豊碑

寛政の三助と言はれた名高い儒者の墓は自分の住つて居る近邊の音羽の護國寺の附近に儒者の棄場と言はれて居る墓所が在つて、其所に荒草離々たる間に豊碑を建てて居る、誰か願ひる者がなると云ふ哀れな状態にある、其他の名高い人の墓も同様で、

風月堂と塩瀬

東京で今屈指の菓子屋は例の風月堂である、風月と云へば習慣的如何にも菓子屋らしい名だと誰も考へるであらう、此屋號は昔樂翁公が命けて遣つたと聞いて居るが、文字の書所が赤壁の賦から來て居ると云ふのが少しく意外である、即ち一月白風清の四文字が據り處で、風月の字人は號を「清白」と稱して居る、而して清白の號も樂翁公の命じた者である、その、乃ち月白風清の四字を、宜に逆配合して一を屋號とし

木村兼葎堂は浪華の町人でありながら、非常に趣味の廣い人で、學問に於ても書畫に於ても大家と云はれた、此中此人の海外にまで聞えたのは、多くの博物標本を蒐めたことである、當時支那人、此人の名聲を聞き、浪華までわざわざ尋ねて來たものがある、大阪の町へ這入ると、高く聳えて居る本願寺の別院が兼葎堂に相違ないと早呑み込みで出掛けて見ると、それではなく、愈よ尋ね當つて見ると菓子箱の様な意外の小さな町家であつたので一驚を喫したといふ。

を雅號としたもので、殊に清白の二字は菓子屋には實は適つた清雅な雅號をなす、其の材料の所有者で、此屋の牛祖は支那の林和靖だと云つたら事の意外に驚く人もあらうが、鹽瀬の謂先は歸化人で確乎とした證據もある、誰れも知つて居る通り林和靖は鶴を愛した、今の鹽瀬の看板に鶴と梅の商標が附いて居るのもそれが爲めである、又鹽瀬は日本の假垣の開山であるのみならず又字引の集山とも云はれて居る、古くから「假垣屋本」と呼ばれて居る節用は日本に於て最も古い字引の一つで、それが假垣屋から始まつて居るなどは意外と云ふてよからう。

々解し難い、熟語や新語に一々訓解を附したもので、四枚乃至五枚位のものであつた。

雙魚堂録註

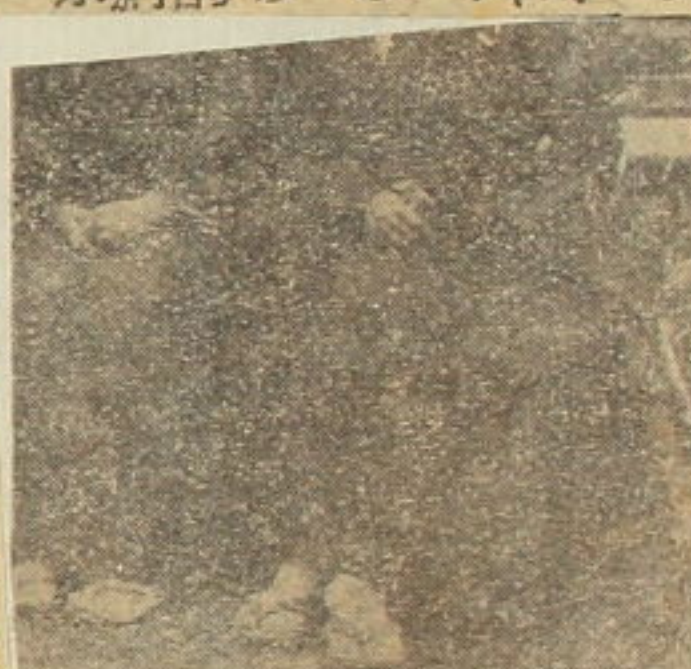
雙魚堂主人談

◎ベルリの招待

前嶋男の談に曰く、ベルリの黒船が初めて浦賀の門を叩いた時分は、我國の朝野を擧つて外國の事情に通せぬ爲め、種々の滑稽もあつた。ソコでベルリは外國の慣例として船中へ在朝の人を招待した。當時の官服たる、烏帽子直垂を以て招待に應ずる事となつた。全体外國船は永い航海を経て港へ達すれば船体の塗換やなにかをする例があるのに、そこへ烏帽子直垂では困る譯だ。時に外國の事情に通ぜぬ某と云るものが通譯旁案内して行つたが、何うも失態がないとも云へぬので、奉書紙に三つ折の紙を大書して、船の入口に貼付けた。第一新たにペンキを塗換へてあるから欄干や障壁等に直垂

印者

開ける尙書會紀念撮影
六〇山川首六(七七)平石五郎
同橋タカ〇中段右より、羽賀キ
川越ス(六九)山川(八一)
笠原フヤ(七七)川村カノ(七
(七九)古澤ノブ(七三)



◎綠林五漢録

一日書店涉獵をして居ると、ある店に唐本で『綠林五漢録』と題する者があつたので、面白そうだと思つて購つて來て讀むと、豈圖らんや、之れは誰れかど書いた『白浪五人男』と云ふ小説が、支那にて斯様な表題の下に翻譯されたものだと思つて一笑した。

▲點字八犬傳

曾つて東京盲啞學校校長小西君の囑に應じ自ら同校に臨み盲人に對して馬琴傳を講じたことがある、其際自分は盲人に同情を寄せ、主として其失明後の事を語り、馬琴が失明しても尚ほ八犬傳を書き續けた其の苦心や馬琴の偉い事などを説き、失明後書き續けた八犬傳の字數に及び、ザツト調べた見を所、五十八萬字位になる、此の馬琴の場合に尤もよく當てはまる、此計算から云ふと先づ六億圓の値ひがあるなどと云ふて、一場の講話を濟した後に、案外の事の起つたのは小西校長が自分に對する返禮と云ふ意味で、盲人に點字で作つた八犬傳の或部分を朗讀させて聴かされた事である、あれ丈大部の書物が眞逆盲人用の點字で幾んど全部に近く譯されて居ようとは思はなかつた。

▲西郷と板垣の腕比べ

西郷と板垣とが例の征韓事件に何か密かに約したとがあつた、西郷より洩れ聞いた氣早の桐野利秋は、それは怪しからん事と云ふので、直に板垣を訪ふて詰つた、板垣も桐野の意氣に恐れ、議論の上では屈服したが扱て納まらぬのは西郷が其密約を破つたことだ、板垣早速西郷を訪ふて何故に桐野に洩らしたかと苦情を尋らし、激論の末漸く事は落着したが、其時板垣は懷中に秘めた短刀を振り出し、實は次第に依つては君と決闘をする積りで之を持參したと云ひつゝ其短刀を示した、之を聴くと西郷黙然として奥へ行つたが、忽ち一刀を手にして座に復し、「お相手を致さう」と開き直つたので、板垣は遠かき蒼くなつて、そこへ去つた、後に西郷人に語つて「板垣は易しい人だ、實はあの時、さらばと云ふて相手とならば、此方が困つたのであつたと笑つたそらだ。

▲松と逍遙博士

自分の新居の入口に大なる風致の善い松が一本ある、宛も鉢植の松を移した様な趣があつて、玄關の入口に就て一工風あるといふ、何かと聞いたら松の背後にある玄關入口の格子戸を檜の四枚戸に改めよといふ、成程能舞臺の背景になつて居る松とよく似て居るから、芝居氣を離れぬ逍遙君の此の工風の浮んだ譯と會得した、序に言ふことがある、先頃久し振りで逍遙君の宅を訪問すると、塀が塗變へてある、能く見ると板塀

▲洋人に對する誤解

大槻盤水の蘭國通覽を讀む人は、昔邦人が洋人に對して意外千萬の誤解を抱いて居つたことを可笑く感ずるに違ひない、其一二を擧げて見ると
一、西洋人の足部に「カ、ト」無しと思惟したること
二、西洋人の膝は屈伸せぬものと誤解したること(椅子に憑るを常とし座せざるが故に此誤解あり)
三、放尿の際に片脚を擧ぐると思惟せしこと(禽獸を以て彼等を目したる結果と同視したり、又放尿の時人の見るを嫌ふが故に旁々此誤解を招きたり)
四、房中交接の場合にも邦人と異なることある様に誤解したること(盤水委しく此事を記されど、特に日本人と異ならずと痛じあるを以て見れば、此誤解ありしと思はる)
五、洋人はすべて長幹の人のみにて矮軀の者絶對に無しと思惟したること(偶々來る者概ね長幹なりしが故に斯く思惟したるか)



春城雜話(一)

市島春城

山陽は何故に人氣があるか

萬人に親しまるる頼山陽

古來頼山陽ほど人受けのよい儒者は無い。其の作品は時を過ぐる程世に持て囃されて、殆んど冷熱無く、今日にては山陽の揮毫した物は空前の價を保つて居る。其の筆蹟は如何にも廣く行渡り、殆んど全國に分布されて、山陽の曾て足を踏入れたことの無い所に迄及んで居る。而して山陽の書いた物は、金持にも貧乏人にも喜ばれ、老人にも若い者にも愛されて居るが、其の愛され方が、他の先哲の愛され方と、大に異なつて居る。たとへば空海とか、眞淵とかいふ人々の作品は、之れを愛する者の範圍が甚だ狭い。且つ之れを愛する者の心持は、愛するといふよりは、寧ろ尊敬するといふ方が主になつて居る。然るに山陽の作品に對しては、何人も親しみを以て之れを愛翫する。他の、書などを書く人の作品には矢張り親しみを以て愛されて居るものも少なくないが、それは畫である爲めに親しみ且つ愛されるのである。山陽に於ては、畫も無い譯で無いが、其の畫はいはゞ素人畫であつて且つ其の數が極めて少ない。今日残つて居る山陽の筆蹟は大部分書であるが、其の書が非常の親しみを以て萬人に愛賞されて居るのであつて、かゝる例は殆んど山陽のみに見る

所と云つてよ。

山陽と日本外史

斯様に山陽がいつ迄も人氣を有して居るのは何故であらうか。山陽の著はした日本外史が、大に時勢に投じて、幕末の風雲を鼓吹する上に力のあつたことは、いふ迄も無い。山陽の名聲が其爲めに大に揚つたことも、疑ひ無い所である。併しながら山陽の名聲が、日本外史の著述あるが爲めに、いつ迄も持續して居るものとは思はれぬ。成程、山陽は日本外史に勤王論を寓して、天下の志士を鼓舞し、倒幕の後援を成したに相違無いが、今日は時勢一變して、敢て日本外史から勤王論を聞く必要も無い時代となつて居る。して見ると山陽の書いた詩だの、書だの、畫だのが手廣く持て囃さる、譯は、強ち山陽が日本外史の著者であるからだといふやうな、單純な理由に依るものではあるまい。

國民的文藝家たる山陽

愚按では、山陽の作品には民衆に喜ばるべき素質がある。言ひ換ゆれば、山陽は國民的文藝家であるが故に、廣く、長く一般から歡迎せられるのであると思ふ。日本外史が今日尙ほ讀書子の愛する所となつて居る所

以も、やはり其の歴史が國民の嗜好に投ずるやうに書かれて居るからである。山陽は外史を著はすに就て、一種の新しい文體を工夫した、それが丁度國民の嗜好に適する文體であつたのだ。それより以前の歴史家は、日本の歴史を書くに當つても、無暗に支那の文章の眞似をした結果として、其の書かれた歴史は恰も左傳でも讀むかの如く、丸で日本味のないものであつたが、

山陽の外史は何處迄も日本歴史の體を得て、一頁讀んでみても、直に日本の味を會得することが出来る。全體、新體の文章を工夫すると、いつも非難の起るものであるが、此の外史の初めて世に出た時も、漢學者の方面から盛んに非難を受けたものである。山陽が此の新體を工夫したのは、恐らく司馬遷の史記に學んだものであらう。司馬遷も史記を著はすに就ては、一種新體の文章を創め、史實の編成に關しても、既往に無い工夫を施したので、矢張り當時非難が少なくなかつた。漢書の著者が司馬遷を非難したなどは、著名な事實であるが、併し一時非難はあつても、後に至つて、史記は不朽の書と稱せられ、今日にては、史記こそ西洋の歴史の體を得て居ると云はるゝに至つた。日本外史に

於ても亦之れと同様の趣があつて、今日最も廣く讀まれる、漢文の歴史はと云へば、第一に外史に指を屈せねばなるまい。其の廣く行はるゝ所以は、繰返すやうではあるが、其の書き方が國民的であるからである。

惡文の模範とされた日本外史

日本外史の文章は宛から五彩燦然たる錦繪を見るが如くで、其の描寫の仕方は頗る妙を得て居る。書中に記された英雄の行動でも、戦争の記事でも、軍書を讀むよりも、遙かに生彩があり、又興味がある。併し當時の漢學者は多く支那古代の文禮を尙んだため、日本外史は之れに外れて居るといふので非難を加へ、聖堂では惡文の標本として、ある部分を抄出して、之れを學生に直させる材料にした程である。繪畫の方面に於ても、其の時分は尙ほ狩野士佐にあらざれば繪で無いものゝやうに思ふ者が多かつた。それと同じく文章に於ても、支那の古文を模倣したもので無ければ文章でないと思せられて居たのである。さういふ時代に、突如として新體の文章を發表したのであるから、山陽の日本外史が學界の非難を浴びたのも無理は無い。

日本外史と浮世繪

書界に於ける土佐や狩野といふものは、貴族階級に喜ばれた畫であつて、國民的のものでは無かつた。浮世繪は市井の俗畫として排斥されたものであるが、實は其の排斥された俗畫こそ、眞の意味に於けるナショナル・ピクチャーである。今日になつて浮世繪が大に地歩を占めて來たのは誰も知る通りで、畢竟國民的繪畫として一般に認められ來つた結果に外ならぬ。日本外史の文章は、此の浮世繪にたとふべきもので、其の事實を寫實的に寫して、何人にも讀み易く、解し易からしめた點は、丁度北齋や豊國の業を文章の上に試みたものと言ひ得るであらう。又、其の論贊になると、慷慨の氣が漲つて、懦夫をして覺えず起たしむる力がある。是等の點に於て、日本外史は國民の師となり、友となつて、之れを指導し、激勵して居る趣ありといふべきである。

經學に暗かりしは山陽の仕合せ

一體、山陽は學者といふには、餘りに經學に暗かつた。山陽は才の人であつて、學の人ではなかつた。併し經學に暗かつた丈、それ丈其の拘束を脱して、

縦横天稟の才を馳せることが出来た。若し山陽が後ればせに經學者となつて、力を其の方面に用ゐたならばどうであつたらうか。遠い過去は兎に角として、山陽の時代に於ては、經學といふものは、國民文藝家に取つて既に餘り必要のもので無くなつて居た。若し山陽が經學の造詣深く、經書の註疏に没頭したとすれば、あの位の天才を有して居ても、恐らく遂に一學究となつてしまつて、自然種々の束縛を受け、縦横の筆を揮ふことが出来なかつたことと思ふ。元來、經學者といふものは、多くは文章に拙なるものである。山陽のやうな氣の利いた文章は、到底經學者に望み得べきもので無い。畢竟山陽は、經學に暗かつた爲めに、却つてあのやうな氣の利いた文章を書くことが出来たと云ひ得るであらう。山陽の文章は如何にも學者ばなれがして居て、腐儒の臭ひが絶えて無い。そこが又國民の嗜好に適した所以であると思ふ。

山陽の手紙

山陽の手紙に至つては、色々の意味に於て古今獨歩と云ひ得る。それは稀世の文才にも依ること勿論ながら、一は又山陽自身が通人であつたからだと思ふ。山

陽は若い時分に遊蕩生活をして、勘當を受けたり、貧乏をしたり、具さに世の酸味を嘗めたから、其の手紙に現はれた片言隻語にも自ら人を外らさぬ妙がある。滑稽もあれば、諧謔もあり、間々俗な事も書いて、人情の至微に觸れて居る。さうして野卑に落ちずして、相當の品位を保ち、金を借りる場合ですら、尙且つ自己の地歩を占めて居る。此んな手紙の書きぶりは、到底經學者などの企て及ぶ所が無い。山陽の手紙は、其の存命中に於ても、一般に珍重され、友人ですら之れを大切に保存したものがある。其爲め山陽の手紙の今日に傳はつて居るものは非常に多く、自分の寓目したものだけでも五六百通に達する。若し全部を寄せたらば幾千通といふ多數に上るであらう。斯様に珍重され、保存さるゝ所以は、山陽が高名な文人である爲よりも、其の書き振りに得も言はれぬ面白味があるからである。山陽は確かに手紙の文にも、獨自の一體を創めたものと言つてよい。山陽以前に於ては、久しく支那風の形式に拘泥した手紙の體が行はれて居たのであるが、其の形式を破つて、情味本位の、氣持のよい手紙の書き方を教へたものは山陽であると云はねばならぬ。

山陽の手紙は正に通人の筆であつて、國民用書簡の軌範となすに足るものである。

山陽の書風

山陽の書風について見ても、又國民的であると云ひ得る。晩年の書は殊に熟したもので、優麗の感が深い。能書ではあるけれども、書家の臭氣が無く、又志士的の粗豪な所も無い。何處と無く氣品があつて、流暢を極めて居る。云はゞ萬人受けのする書で、誰れが見ても氣持よく感ずる。其書が近來空前の値を生じて來たのは、全く何人にも喜ばれる書風であるからで、此點も亦廣く國民の嗜好に投じて居るものと言つてよい。

多方面の趣味家

山陽は如何にも多方面の趣味家であつた。此の多方面の趣味家であつたといふ事も、亦種々の方面に人受けのよい原因をなして居ること、思ふ。山陽は書畫や骨董に鑑識のあつたことは勿論、煎茶もやれば、酒も飲む、印を彫つたり、盆栽を玩んだり、平家を語つたり、芝居を好んだり、實に其の嗜好は有らゆる方面に及んで居た。此の多様の趣味は自然文章の上にも現はれ、従つて其の文章には他人の及ばざる趣味を生じて

來る。だから風流を喜ぶ人達は、どうしても山陽を喜ばざるを得ぬことになるのだ。書畫の題識とか、骨董の記文とか、それが山陽が書けば重きを成すといふのも、山陽が其等の趣味に深く通じ居り、之を讀めば何人といへども首肯せざるを得ぬからである。之れが又山陽の廣く持て囃さるゝ一原因であらう。

山陽の人間味

山陽は人物それ自身が國民的であつた。彼は生涯布衣を以て終り、一度びも仕官せず、高祿を食む如きこと無かつた。彼は布衣ではあつたけれども、一種の見識を持って、役人に阿諛するやうの事は無かつた。彼は飽く迄も國民の典型たらんとした慨がある。併し半面彼は決して無疵の人では無かつた。何れかといへば頗る疵の多い人であつた。此の疵の多かつた事が、頗る山陽の人間らしい所である。若い時分に遊蕩をしたり、勘當を受けたり、逐電したりして、一時は不孝者として擯斥された。併しながら是は若い時には有りがちな事で、どうかすると其れが墮落の種になるものであるが、山陽にありては踏止まる可き所に踏止まつて、晩年大に改むる所あつた。此の若い時分の人間らしい

生活から、大に世味を理解したのであつて、即ち山陽も亦一種の俗物であると言ひ得る。俗物であるから、世俗に同情があるのだ。あの人の人間味のある所が、又一般世人に喜ばるゝ、所以であらねばならぬ。

二様の山陽論

山陽に對しては世間に二様の見方がある。即ち山陽を一種の偶像として、其の如何なる疵をも辯護する人があると共に、又山陽嫌ひの一派があつて、其のアラ許りを摘發する人もある。併し其の何れも中庸を得たものと云ふことは出来ぬ。私は山陽を以て、最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買入可き所は、その常識があり、人間味があり、多趣味、多藝で、且つ頗る氣格の高い所にあると思ふ。従て一概に之を崇拜することを非とすると共に、其の若い頃の瑕瑾をいつ迄も叫んで、之を罪することを欲せぬ。山陽は若い時に素行が修らなかつた爲に、却て晩年の大成を見たのである。尊ぶ可きは山陽の亂行でなく、其の一度び志を立て、惑はざる所にあると思ふ。恐らく山陽も之れを以て公平の評として首肯するであらう。

墨國新油田法實施

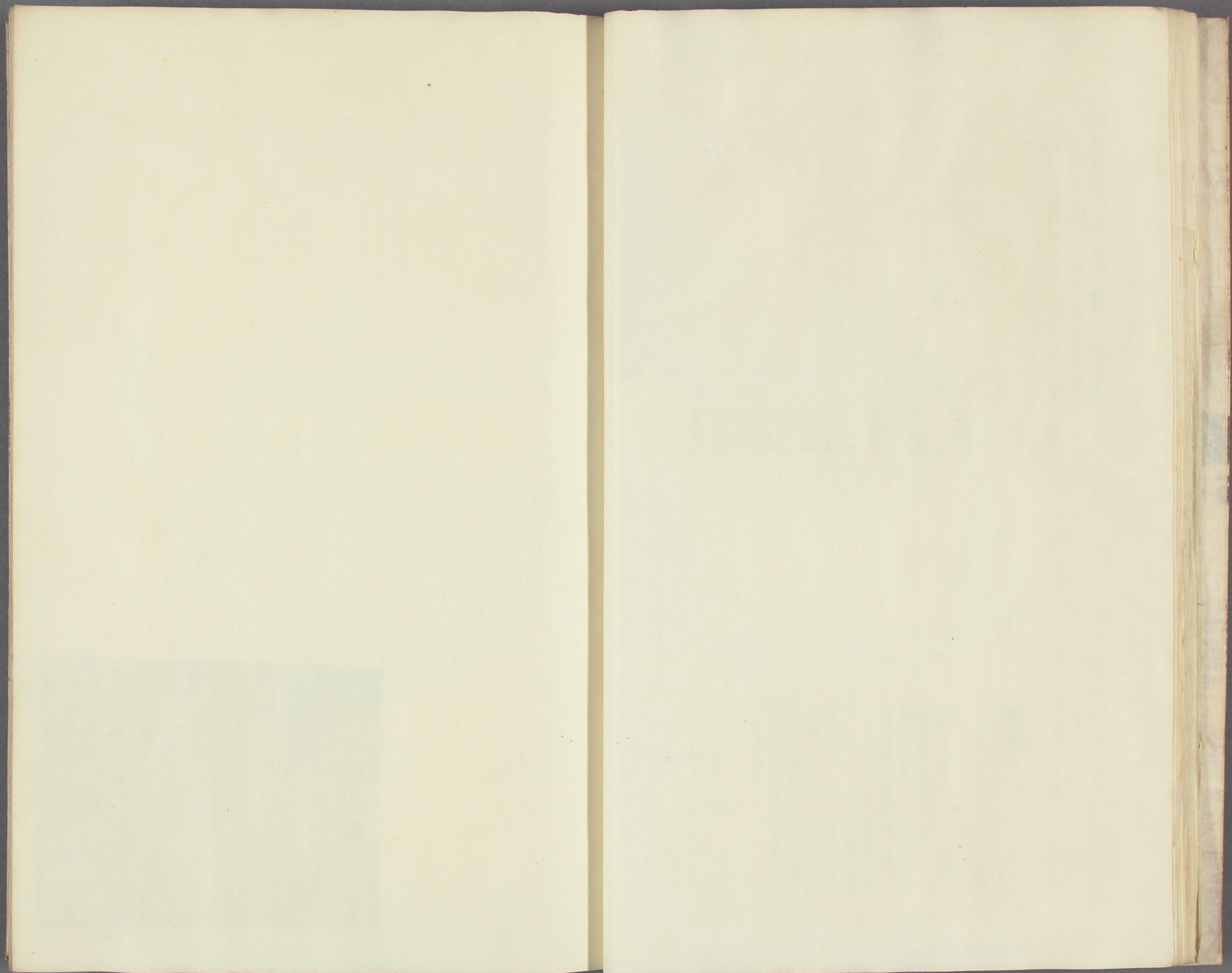
墨西哥新油田法は愈々一月一日午前零時を以て効力を發生し、墨國政府は同法を直に實施せん事を期して居るが、一方墨國に密接なる利害關係を有する米國石油業者並びに民主共和兩黨政治家は右油田法施行のため一億五千萬磅の巨額に達する米國資本家の投資事業が沒收さるゝ危険を憂慮し、目下國務省に對して米國政府が右法について如何なる方策に出づるやと頻りに問合せをなして居る。墨國の石油田法に對してはひとり米國石油會社が之れに反對して居るのみならず、英國系石油會社も米國石油會社と全く同様の意見を有するものであると云はれて居る。尙國務長官ケロツグ氏は近く駐墨米國大使に引揚げを命ずると共に、墨國への軍器輸出禁止令をも撤回せん事を提議せんとして居るとの噂があるが、米國務省は墨國政府が右新油田法により米國資本家の油田を沒收するが如き具體的事實に關する確報を得るまでは何等決定的行動には出ないであらうと云はれて居る。(一月一日華盛頓發電)

◎火山と養蠶

火山と養蠶の關係と云へば何だか不釣合の様であるが、或る學者は學術上密接の關係があると論じた事がある。成程日本は、地理的に調べて見ると、養蠶地は多くは中央内地で、火山作用の甚しい處たると云ふ迄もない、しかも事實は然りであるが、何故斯様な處に養蠶が發達するかに就ての理由は判らぬ。併し火山作用の甚しい處でなければ桑が繁茂せぬ。桑は火山灰、浮石層の地質が一番成育に適すと云へば、火山と養蠶業の關係も、解釋し得る譯である。

▲案外の托鉢

近年自分が長崎へ行つた時に、其地に有名な黄檗宗の寺々を廻つて見ると、寺は有名な隱元、木庵、即非等世に謂ゆる隱木即と呼ばれる高僧の居つた處だけ如何にも立派なもので、且つどこからどこまで支那風で少し和臭を帯びて居らぬ處にひどく感服した、其際に隱木即の遺墨が多く傳はつて居るだらうと云ふので見せて呉れいと頼むが、其の答が意外であつた「遺憾ながらそれ等は一旦市中へ托鉢に出掛けたきり終りに戻つて來ぬ」と云ふた、此等の寺々は檀家が無い爲めに或時代に財政窮乏の結果、質屋へ寶物を悉く入れ、そ



趣味談叢



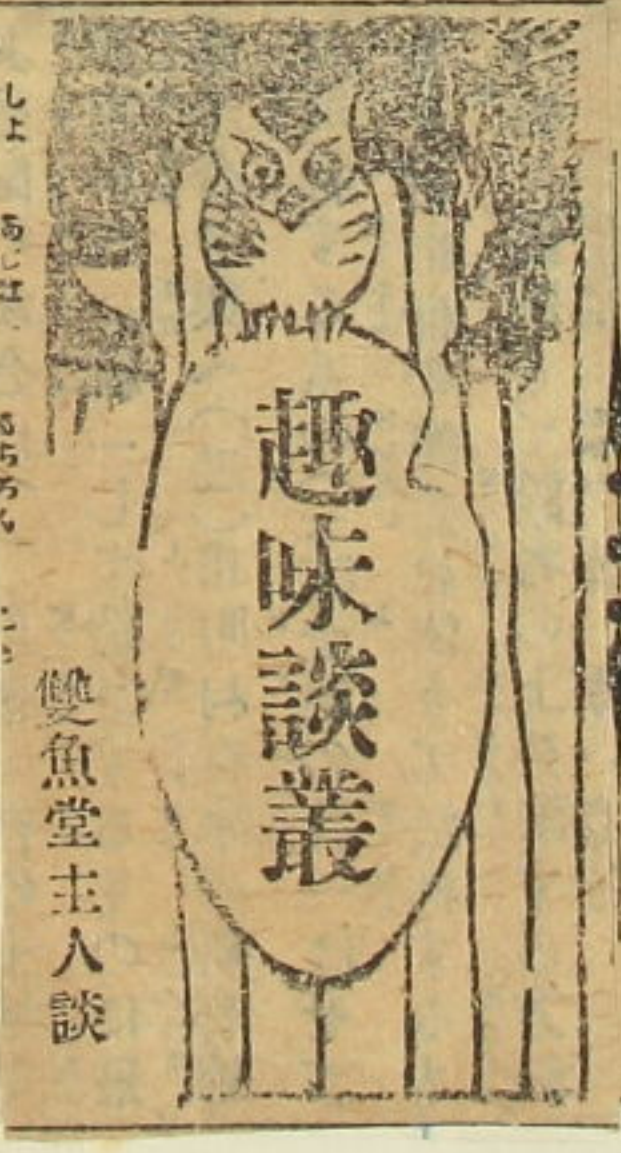
雙魚堂主人談

◎古經趣味、少し濫ぶ過ぎる、しかし一の趣味だ。古るいとを味ふには先づこれに越したものは無い、昔から好事家が一行得ても躍り出して喜ぶほどのものだ。大切なる例を云へば人に貸すに目方をかけて貸す程のものだ。屋代弘賢が武州の慈光寺の小水磨の貞經を一尺ばかり得たと云ふので、大喜で一行つと切つて商人に喜びを頒つたなどもある。

○なぜ開んなに大騒をするかと云ふに
大体は骨董趣味からして、ツマリ得難い
一からである。版て云へば宋版經、寶龜
版の陀羅尼經、これは世界最古と云は
れて居る。近來支那にも發見されたし
云ふが、寫經で云へば大中の聖武經、
光明皇后の願經、皆それ／＼古くて稀
であるから、いろ／＼史的趣味あるか
らだ。ナント云ふても千年から經つた
書きものは決して多くある等のもの
はない。讀んで見た宋人製開の書畫が
一幅で二萬圓もする位だ。現んやそれ
より以前のものと來ては、日本では皆
國寶になつて居る位。それを觀賞して
無暗によかるのも好事家に於て無理の
ないことである。

○然かし古經の價值は單に骨董趣味ば
かりではない、書の方から云ふと實は
研究の價值があるのである。先づ版の
事は目らく措き、寫經に就て云へば多
くは寫經生の書いたものであるが、い
くら寫經生だと云ふても、其時代／＼
の風がある。天平は唐風、鎌倉に一種
の日本風と云ふ彌梅に、これを時代分
にならべて見ると、書の變遷などもわ
かつて、仲々味ふに足るものである。
○寫經生杯と云ふても仲々馬鹿になら
ぬ奴が居る。帝王の願經などになると
立派な寫生を選擇して書かせるから實
に立派なものである。此頃友人が手に
入れた本願寺舊藏の首楞嚴經(天平)な
どは實に堂々たる書だ。筆者の名が山
部諸公と明かに書いてある。此經と同
じさの師等や醍醐寺にもある。又
同じ友人の所持して居る根本百一經磨
第八卷(天平十二年願經)、これも名高
い筆者の書いたものだが、實に美事な
もので、唐人の書と見違ふ位である。
○寫經生の筆ですら此の如し、況んや
高僧、自筆に於てをやだ。大師や良辨
や眞澄やこれ等の名流の筆の跡は、經
の上でなければ窺はれない。空海に就

て云へば國寶となつて居る仁和寺の三
十帖冊子、これは空海入唐の折歸りが
けに寫經々に寫させたものであるが、
なか／＼抄どらぬ所から自分が助筆を
した、寺の傳へては、橋邊勢も助たと
云ふとになつて居る。大師の眞面目は
これになければ窺はれない。但し橋
邊勢云々は虚説である。兎も角コンナ
風に語ると一行でも人の欲しがるは無
理もあるまい。世には昔公の經だとか、
武だとか、光明皇后だのいろ／＼の
經があるけれども、それは皆本人の書
てないとは明かであるが、本人の書で
なくとも其時代の書として確かに相當
の趣味のあるは云ふ迄もない。



健魚堂主人談

○書を味ふは勿論の事であるが、いろ
／＼趣味をするると別に又いろ／＼の趣
味が湧いて來る。紙の事。これは麻紙
だ、これは穀紙だ、これは茶毘紙だな
ど、段々研究すると面白い。
○光明皇后の願經などは多く穀紙だ。
穀紙は奇麗であるから、成る程女流が
特に好みて遣らせたと云ふとも會得せ
らる。茶毘紙は茶色の脆いわるい紙
である。なぜコン紙を遣つたかと調
べて見ると、線香抹を入れて紙を濡か
せたものと分つて見れば、成る程佛法
流行の折柄なれば左もあらんと納得せ
らる。

ひて居る。鉛筆は當時確かにあつた。
現に正倉院に存して居る。コンな事を
調べて見ると興がある。佛では獸類の
アブラなどを厭ふは云ふ迄もない、金
銀泥を銘くに何を用ひたか、それは膠
にあらす豆のゴリを用ひたなど云ふ事
を知るも趣味でない。
○更に一步を進めて筆者などの研究を
して見るのも趣味ある研究
だ。たとへば、例に挙げ
たる白一羯磨の紙尾の軸付
を見る、それに山部一校
小野など云ふ覺え書がホ
の二三字存じて居る。それ
を大日本古文書に就て調べ
て見ると、同書二ノ二九二
丁を見るに、筆者山部は花
麿であることがわかり、又
同書二ノ二九一丁を見るに
此人が新四戸枚を受取つた
事などもわかる。こんな具
合に分つて見ると、實に言
ひ難い趣味を感じ、寫經道

▲六朝文書展観(一)
西本願寺法主が、西域探險の際獲た六
朝古文書の事は、前にも一寸話したと
があるが、今回京都漫遊の際、之を見
るを得たのは幸である。彼の佛國政府
が敦煌石室で獲たものは唐末のもので
唐末既に珍とするに足る、況んや六朝
時代のものと云つては世界の大稀觀で
ある。世界何れの國を尋ねても此時代
の正しく書いたものはない、一點にて
も天下の珍とすべきものであるのに、
如此方面に亘るものは各國に於ては
勿論、支那本國に於ても匹敵するもの

がない。趣味の満足のみならず、歴史・美術等の研究に於て非常なる材料となり、一大貢献をなすものである。且つ支那は謂ふ迄もなく大國にて、或る邊土の如きは容易に足を踏入れると出来ぬ事は、西本願寺の法主が新疆省(西域)に行くに就て多くの兵隊の保護の下に行つたと云ふとても察せられる。即ち餘程の有力者でなければ斯る冒険的旅行は出来ぬので、偶々志あるものも能く遂行し得なかつたのに、法主が非常なる苦心をして探險したと云ふとは、學術の爲に感謝に堪えざるものである。今自分の日記の中から、同古文書類展覧の項を左に抄録す。

◎五月廿四日西本願寺に到る、法主の近く支那西域に於て獲たる六朝文書類を展覧せん爲也。

◎余は東本願寺に抵り見しことあるも西本願寺を訪ふは初めて也。寺僧の案内にて先づ保護建造物を見る、こは云

ふ迄もなく豊公が豪奢を極めたる桃山御殿の幾分を移したる所、鴻の間と云ふ處は疊四五百枚を敷くべく規模の雄大裝飾の美實に驚くに堪へたり。昔し豊公が列侯を引見したるも此室なりなと想ひ起せばなかくに低徊去るに忍びざるの感興あり。書院傳ひに四五の室打連なる、皆桃山の遺物にて、金襴の繪畫、格天井の結構、流石に太閤の豪奢を想はしむ。

◎長廊下を通り抜け奥まりたる一室に行けば内藤湖南先づ到り余の來るを待つ、湖南は余の紹介者にて又西域文書類の説明者也。法主近く獲たる所未だ人に示さず、唯だ湖南に整理を托したる故を以て、余特に同君の紹介に依り今日展覧の幸を得たり。

◎先づ寓目(あきま)のものを分類すれば左の四種となる。

一 器物、二 文書、三 繪畫、四 碑石、其數幾百點の多きに及び、時代は六朝代より唐代に至る。而して何れの地より獲たるやと云ふに所謂西域即ち今の新疆省の咄咄溝邊より發見したるもの多きを占む、場所は恐らく昔の城墟なるべし、石壁の如き處を掘り崩せば土と和して種々のもの出て來る、器物を初め文書も皆土にまみれあり。唯だ土質乾燥雨氣少く處なるを以て保存今日に至る。此點は日本のごとき温氣深き國土に慣るゝ頭腦を以て想像しがたきものあり。

◎さきに佛國政府が敦煌石室に獲たるものは珍は乃ち珍なりと雖も、時代は晩唐に屬す。これは六朝の唐代に及び其珍なるを遙に敦煌以上に在り、日本に於て稀觀のものたるのみならず支那に於てもまことに稀觀のもの也。



雙魚堂主人談



雙魚堂主人談

◎先づ第一類より序を逐て細説せん。此部類には古錢あり佛像あり指輪あり封蠟印あり銅玉の印あり、其數二百點に及び、雜然として一々調査の暇なしにして云へば皆な小品にて完璧の六朝佛もあれともそれは銅佛のみにて多くは素焼の佛像の頭のみなり其の佛像の内には面貌頗る研究の價値あるものあり殊に注意を惹きしはギリシヤ式ガンダラ式とも見るべき面貌のもの四五を認めたり。耶蘇教のマリアとも見るべき像あり、天地佛あり、佛を鑄たる型の完全なるもあり、封蠟印の内には洋式に酷似するものあり、錢の内には右錢譜に會て類例を見ざるものあり、陳列中の多數は未だ會て寓目せざるものにて玩賞極めて趣味を感じたり。

◎第二類文書類の内には經文大部分を占むれども間々論語左傳のごとき經書の断片の交れるあり李柏の款識ある手簡あり借用証文あり木片を以て作りたる逮捕狀あり、此等の文書類の内には完壁のものも少からず例へば發掘物中尤も貴重なる李柏の書翰のごとき其他幾多經卷のごとき完全なるもの少からずと雖も發掘の際土砂の崩ると共に寸裂したるもの少からずして最も貴重なる部類に寸裂せる断片のことに少からざるは惜むべし。

◎左に寓目(あきま)のものを掲げ所見を注す。一、寫經 元康二年の款識あり、西晋惠帝の年號也

紙は麻紙にて輪廓の界は鉛線にならずして墨線也唐以後の經のごとく輪廓の天地に多くの餘地を存せず此一特徴也

書は隸楷こねませたるごときものに頗る特徴あり以て案ずるに此頃に楷書なしなど云ふ論は成立せず

他の六朝經断片を見るに書は純正の隸体にて尤も妙を覺えたり紙は黃麻紙也

六朝經は隸体に限らず楷体に書せるもあり然れども多少隸体を加味す過渡の趣見るべし

一、論語断片 方二寸位のもの、唐代の物と覺しく民字を忌み代ゆるに人の字を以てせる所あり

日本の古寫論語と一般今日の版本と文章異なる所あり

一、史記漢書断片 形ほゞ全上、表裏に史記漢書を寫しありこれ又書体を以て判するに唐代のものたるや疑なし史記は仲尼弟子列傳の断片也漢書は張良傳の一節也

一、李柏書翰二通 完全のもの二通他に李柏の名の散見する同書体の寸断されたるもの一括あり

これエンチダリヤより發掘する所と云ふ

李柏の名晋書八十四卷に在り時代は東晋の初今を距る千五百八十餘年前王羲之と同時なれども李柏寧ろ先輩

也。書翰はすべて焉者王に與ふる所、紙は我邦の擅紙に酷似してあつばつたきもの也。書は行体と云はんより寧ろ楷体の少しく崩れたるもの巧妙と云ふを得ざれども往々義之の筆意を認むるの字あり。

一、左傳斷片 成侯十七年の條也勿論唐代の書

一、借用證文二通 (内一通完全) 大曆十六年とあり借用主揚三娘紙尾に舉錢人保人を併書す舉錢人は借用主保人は保証人也各年齡を併せ記す紙質簾紙にて厚手也

楊三娘とあるを見て我が藤三娘(光明皇后の事)を聯想す、總して書体体裁若天平文書の面目あり時代は争ひがたき似よりの趣あるものなることを今更のごとく感したり

一通の斷片は文言完からず併し唐代の書にて矢張大曆のものたること疑ふべくもあらず、これには紙尾に連借人を併記す

錢主………
 舉錢人………
 保人………

錢主は言ふ迄もなく貸主なり紙亦同以上二通クムトラに於て獲

一、逮捕狀 幅三寸程の木片を薄くへぎ其の一面に楷書を以つて細記しあれども讀みかたしこれは罪人の逮捕狀にて今も支那にては逮捕狀は紙に認めず矢張り木片を用ゆと云ふ書体を以つて判するに恐らく唐代のものならん

◎以上の外經卷の完きもの又斷片數十通を以つて數ふ唐經多きに居るも余の寓目を經たる六朝完璧の經文又十數を以つて數ふ六朝經は唐經と共に楷書を以つて認めあり六朝の書の特徴は一字の内何れか一畫必らず肉太に書くにありと云ふを得べく書は巧みならざれどもおのづから氣魄あり唐經はこれに反して書体圓熟、粗笨の處なし紙も軸も日本に於て往々見るものと毫も異なる所なし又我聖武經願經などに酷似するものあり大師の書と辨しがたきものあり要するに日本の天平あたりの經を此等と混合せは恐らく何人もよく辨じ得ざるならん。



六朝文書展觀 (四)

◎第三繪畫は皆な佛畫なり、十中の八九は絹本に畫きあり、何れも金碧燦爛たる極彩色にて完璧のものなきは惜むべきも、描法の一端を窺ふの材料とするには充分也。すべて唐代のものたる論なし。

◎寓目のもの二三を舉げんに、天寶十載辛卯正月某日縣君和氏供養と楷書の款識ある佛畫は著色精細、これは絹を二枚縫ひ合はせあり、縫目を檢するに、日本に所謂るフセ縫と云ふものにて、極めて巧みなり、又吾が鹽瀬と見るべき厚絹に畫きたるものあり、これは佛像の面貌と衣裳の一端のみ存す金碧燦然たるものにて金泥に畫き細紋

精を極む。面に隈取あり、裏打たりと覺しく絹の裏に幾許紙の附着し居るを認む。他の一枚は薄絹にて矢張り斷片なるが、よく見れば羅漢式の僧剃刀を取つて他の一人の髪を落すの圖あり、これにも絹を縫ひ合はせあり、縫ひ合はせ方前と同じ。又他の一枚には羅漢の圖あり、其背景に水墨の山水あり、王摩詰などの墨畫はこんなものならんと聯想を禁する能はず、頗る興味を感じたり。此畫恐らく南北未だ分れざる頃の筆ならんか、畫家の參考に資して大なる價值あるものと思はれたり。此絹本の頭邊に第二尊師迦諾迦云々の楷書の題署あり、又色紙大の絹本に悉達太子馬に騎つて門を出てんとす、門前二人の卑隸擔架に死人を載せて擔ぐの圖あり、これ恐らく四苦を翻する圖四枚中の一ならん歟。完璧なるは嬉れし。唐代の風俗之を以つて見るを得べし。又一枚の斷片に人物の肖像を畫かく、存する所のもの二人の面貌と胸襟若干

のみなれども、畫風全く吾が倭繪と同じく、人物の面貌吾邦人の筆かと思はるがほほどなり。依つて想ふに、吾所謂倭繪と云ふものも吾邦の創意に成りしはあらず、矢張り唐風を模したるものなるやも知べからず、心細き次第也。又大曆六年四月十八日の款識ある菩薩の面貌を圖したる斷片あり、畫様恰かも因經の繪に酷似す、これには上柱國錄事雅義璋供養とあり、即ち獻納者也。大曆六年は中唐代宗の時也。又一に佛像の面貌のみを存す、マブタ大きく重く畫きあり、畫様當麻曼陀羅式なり。又將軍塚縁起などを聯想せしむ。



六朝文書展觀 (五)

◎絹本に畫がきたる佛畫の外に、織物

二片あり、一は一見木綿と見しがへること厚き布にいろ／＼の模様を織り出したる方形(五寸四分位)のものにて法隆寺の四天王紋旗の切れによく似たり。他の一は繡佛にて、廣東切れの如き地に天女琵琶を彈するの圖を刺繡したるものにて、精巧驚くに堪へたり。天女の顔は眞圓形にてトルコ式とも謂ふべし。外に細もの二片あり、これには人物なけれど刺繡の精巧は前者に譲らず、友人小川簡堂の所持する天平刺繡は幾許精巧に於て譲らざるを得ずと雖も、趣は甚だ異ならざるを覺ふ。又外に佛像を版に刻したるもの幾通あり、唐代に於てこれあるは珍とすべし。すべて此種のもの異教の行はるる所に却つて早く興りたるごとき形跡あり。

◎第四類碑石、此類には石刻佛像を包含す。これは多く燕京附近に於て獲たる所と聞く、西域の獲物にはあらず、數十の箱に入れたる石片、多くは尺四

方位のものにて、なか／＼珍らしきものある中に、殊に珍らしく感したるは貞觀の年號ある楷書の碑、六朝の小石佛像等にて一々列擧にいとまあらず。

記者曰く右の一篇は雙魚堂主人が管見の際書留めて置かれたるもので、匆卒の際として其詳を盡す能はざるものあるは勿論なれば他日を待て詳細なる説明を煩はす積りてある。

經濟隨筆

市島 春城

紙幣文學

私の知る人に日本の新古の紙幣を極度に集めた者がある。それはみづから藩札狂と名乗る前田惇といふ人だが、嘗つて其のコレクションを全部見たことがある。それに就て種々感ずる所もあつたが、各藩から思ひ／＼に發行した幾千種の楮幣に、幾んど共通であるかの如き一つの物のあるを知り得た。大體天正頃から徳川期の中葉以後に迄及んで居るやうに記憶するが、其時代に諸藩から札を發行するに當つては、必ず札の裏に銘を録したものである。一體紙幣といへば金何匁とか金何兩とか或は其の發行所の名前とか、其他必要の事許り書いてあるべき性質のものであるのに、或る時代に限つて其の必

要を超越して、殆んど必ず此の銘を附するといふところが一種の流行のやうになつて居たやうだ、それはどんなものかといふに、字數は大抵二十字、長いのは三十字もあり、無論漢文であつて、書いてある事柄は紙幣の運用の徳を頌したり、或は富國利民といふやうなことを述べたりしてある。其文は藩中第一の學者が之を撰び、且つ多くは立派な篆書で書かれて居る。紙幣の如き一般に流布するものに斯様のものゝあるのは少しく實用を離れて居る趣が無いでやつたのは、一は之を以て札の裝飾ともし、意匠ともし、又之を以て摸造を防ぐの法としたものであらう。が今一つは斯様の漢學隆盛の時代として、莊嚴な言葉を並べたことを以て、札に權威を附する方便としたものと思はれる。何れにしても此種の銘を集めて、之を書き列ねて見ると、それだけにて彪然たる一冊を成す程で、一種紙幣の文學ともいふべきものが出來上る

譯である。大抵其の銘を撰んだ學者が誰であるかといふ見當も附いて居て、之を研究して見るとなか／＼に興味が深い。

赤化の意義

露西亞の革命このかた、全世界が所謂赤化運動を恐るゝこと、猛虎よりも甚しいが、一體「赤」の字は何を意味することであらうか。漢語に赤族といふ字がある。或る學者は血を流して三族を戮するといふ風に解してゐるけれども、實は誤つた解釋で、赤字は物の虚無を意味し、赤族とは其三族を亡ぼして無くすることである。或は赤土と云ひ、赤貧と云ひ、赤裸と云ふのも皆無を意味し、赤土は不毛の地、赤貧は無一物、赤裸は身體に一絲だも纏はぬことである。昨今世に云ふ赤化は露國の左傾思想の浸潤をいふのであるが、赤は多分左傾派が赤色の旗を用ゐてゐるから來たのであらうが、併し赤旗を樹てる面々は虚無を主義とするものであ

然でない。併し眞逆支那の赤の字に虚無の意味があるからと知つて赤の色を採つたとも思へない、蓋し偶然であらうが、偶然でありとすると却つて興味があるのだ。虚無も一種の理想に相違ないが、之れを實社會に行ふと、往々一國を赤土となすの憂がある。世界の赤化に戦慄するのは此故である。

感情と勘定

「感情と勘定」といへば音相通じて滑稽味をさへ感ずるが、私の考ではこれが近頃露然たる労働問題の「フォルミユラ」であると思ふ。矢張り労働問題も其本體を尋ねると即ち労働の勘定如何に歸着する。同時に又此問題の大袈裟になるのは多くは感情から來てる。そして其感情が追々と激するに伴ひ往々勘定を忘れて争ふことになる。日本の如くに労働者にまだ訓練がなく、争議の場合に無規律なところでは別して感情に馳せて勘定を度外に置く

とつて不利なことであるから、充分考慮を拂ふべきだ。少なくとも其の領袖株は思をこゝに致さねばならぬ。更に一方資本家に於ても亦同様で、早いうちに勘定から打算して解決をつけさへすれば、結局已れに有利な場合もあるのに、これ亦多くは感情に支配せられ無用の鬭争を事としてゐるが、決して褒めたことではない。兎角此等の争議を解決するには双方冷靜に感情を去つて勘定に重きを置き十呂盤づくで折衝する方が、早く埒があいて兩者の爲めになるのである。

労働の本義

近來労働争議が各所に頻發するが、之には種々の原因があるけれども、労働者が労働の本義を解しないことが主たる原因であらうと思ふ。實は労働ほど誤解され易いものは無い。労働は苦しいもの、労働は一の犠牲であると思つてゐるものもある。斯やうに考

へるものは、成るべく労働時間を減らしたがる、サボルことをよい事のやうにも思ふのは自然の勢であるけれども、これは労働の本義を誤解してゐるより起る過である。全體人間の務めは活動にある。その活動の種類は、様々あつて、筋肉労働も言ふまでもなく活動である。人間が生きてゐるからには此の活動が寸刻も已んではならぬ。此の活動の已む時は死ぬのである。活動をツライものとして成るべく避けたいと考へ、サボルものは、活動を拒むものであつて、極端に云へば死を望むものである。死こそ活動と縁を切るものである。よく労働を神聖であるといふが、その意味を取り違つてゐるものが多い様だ。神聖であるから労働を成るだけ避けたいと考へるのは、労働を寶物扱ひにして使はぬ様、減らさぬ様にと考へるのかも知れんが、労働の神聖といふのは、そんな意味ではない。人間本然の活動を爲すのが人間の職分であるから、それを神聖として尊敬する

のである。既に人間の職分である以上は、生のあらん限り根氣の續く限り働かねばならぬのだ。極度まで活力を發揮してこそ人間が生れた甲斐があり、萬物の靈たる所以も明かになるのである。決して人間は賃金の爲めに働くのではない。多くの人は賃金ほしさに労働するものと考へるのは誤つてゐる。賃金は労働から生ずる結果で、それが原因でもない。労働には金銭で換算の出来ない本質的の價値があるのだ。國務大臣の勤務や學者の研究の如きも矢張り労働に相違ないが、賃金のために働かぬことは誰れも知る通りでないか。筋肉労働といふても同じことであらねばならぬ、労働を尊いものと思ひ、随つて労働を楽しいものと思ふのも、畢竟此の解釋から起るのである。そして此の解釋が労働の眞義である。但し文化の進むにつれ労働を省く法がいろいろ工夫されて來てゐるが、これとても労働がみじめなものだからそれを救ふのであると思ふ人があらうが、それ

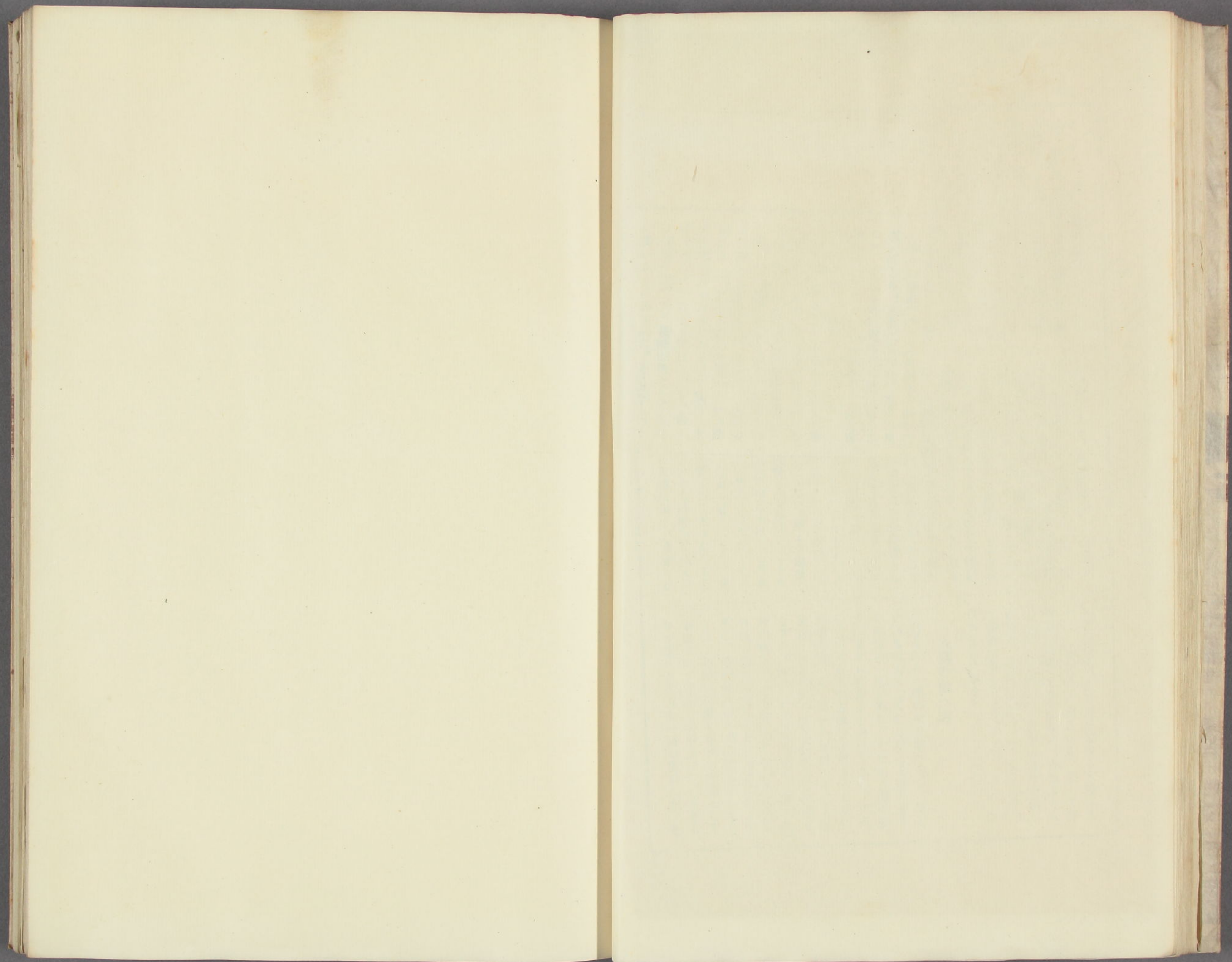
も誤解である。機械の發明は人間の勞力を他に轉ぜしむる所以であつて、文化の進歩は人間の働らく方向を他に轉じて更らにより以上の働きを爲さしめんとするのである。若し、然らずといふものあらば、試みに極端のことを云はん、何から何まで人力を要せず機械萬能の世の中となつたら、どうであるか。人間の活動は不要となるかも知れんが、さうなれば人間の生きてゐる甲斐がなくなる。労働者は皆失業者となつて生活が出来なくなるだらう。しかし幸にして事實さうはならぬ。いくら機械萬能の世の中となつたからといふて、人間の活動を要することが決して無くなる譯のものでもない。論より證據、近世の文明は機械で人力を省くことが盛んに行はれ、百年前若くは二百年前に較べると隔世の感ある位だが、その結果として産業が益々盛んになつて愈々多數の人力を要することゝなつてゐるではないか。いくら機械力が殖えても人力を要する天地は廣く、機械力が

殖えるに従つて人力を要する天地はますます廣くなつて來るから、決して労働者に失業の懸念はない、機械力と人力と併合の結果は、仕事の量が十倍し百倍し、或は千萬倍する。だから今の工場員は昔しの工場員に較べると、十倍百倍の仕事をしてゐるとも云へる。

人壽の數へ方

昔しから人間の年を數へるに、曆といふものに依つてゐるが、人壽の數へ方に他の一法がある。それは人間の働きの量から打算するの法である。天死の人でも其人の事業が百代までも世に利益を與へるものがあれば、その人は若死とは云へぬ。これに反して何事もなせず、碌々として日を送り所謂社會の喰ひつぶしであつては、その人が百歳の壽を保つてもそれは赤んぼうである。活動を人間本來の務とするからには、年齢の打算も活動を標準として割出すのが當然であるまいか。本年も年が改まり何人も一歳を重ねたが、そ

れは曆の上の年齢で、一歳老いたといふても歎するに足らぬ。一年を迎へてもまだ若いといふて安心も出來ず、誇ることも出來ぬ。要は活力の發揮で老若が決するのである。老朽もあれば壯朽もある。何人もウント活力を發揮せねばならぬ。クダラヌ事を事としてアタラ精力を消耗するは人間としてあるまじいことだ。近來労働問題に就て種々の説もあるが、多くは労働の本義を誤まつてゐる、その間違から出發してゐるから、兎もすると忌はしい事がある。こゝるのである、返すく、労働の本義を誤つてはならぬ。



以下
10丁
白紙

幼少時代の風

越後の風

現今では社長の選遷につれ、警察が交通上の取締等から餘り行はれぬが、一時都鄙に風を弄ぶ事が盛んに流行した時代があつた。自分は風の流行時代には越後に居たので、越後の事は知らぬが、小児時代の記憶を惹起して見るも多少の興がないでもないから、少く越後の風に就て語つて見やう。元來遊戯には種々の種類はあるが、最も男性的の遊戯は風であらう。今日飛行機に就て、非常に多數の人が趣味を感じ、格別明敏の智識なきものまで工風を初める様な譯であるが、是等の如きも幾分風遊びなどから趣味が流れて來た脈ではあるまいか。それは兎も角、風遊びと云ふ事は實に小児の遊びなるに止まらずして、徳川時代の末路に及んでは大流行の結果、所謂大僧、大人の遊びともなつたものだ。従つて單に空中に飛揚して遊ぶ計りでなく、他の風と争

角位が最も適したのである。多分、其のものであつた。

○長方形の角型のものに至つては、多く飛揚して遊ぶと言ふ方に屬するものだ。飛揚す事に就ては、無論高く飛揚すが大切であるが、他にうなりをつけるのは天高く飛揚して壯快の響きを放つのが愉快であるからである。六角型にもうなりをつけたものであるが、戦争の場になつると、之れあるが如きは手重で操縦に不利益だと云ふ處から、省くが例であつた。越後に於ては誰も知るが如く風で有名なのは白根だ、中の口川を挟んで兩地互に風を飛ばしてからめ合をするのが越後の壯觀と稱せられて居るので、遠方から山をなす群集が見物に出掛ける、是に至れば無論小児の戦ではない、一村を擧げて戦ふので、勝敗の決は一村榮辱の岐るところと云ふべきものであつた。従つて兩地とも風の操縦には妙を得て居るものであつた。

○自分の生れた北蒲原の水原と云ふ處は現今こそ頗る寂寞たる土地になり終つたが、昔は天領で陣屋もあり、殊に縣内の

ふ云ふ事が起り、其結果糸に工風する様になり、例へば糸に澁を塗つて固め、或は硝子の粉を塗り、遂には剃刀を糸に結び付け、または各式の方言「サンマタ」と稱する金物を付けたり、種々なる武裝をして揚げる事が追々初まつて來た。時には互ひに約してからめ合をなし、或は不意に奇襲を試み、延ては一町と隣町、一村と他村の戦争となり、人氣非常に興奮し、村や町が負けては不名譽だと云ふので、一村一町の壯丁が擧つて出で大騒ぎをする。云ふ譯で、非常に敵愾心を惹起す、即ち泰平無事の天地に於ける一種の武技的遊戯とも云ふべき者であつた。是等の點よりすれば、風は男らしい遊びであるのみならず、人氣を引立て愉快ならしむる性質のものである。

○自分の小児時代には、他には趣味はなかつたが、風だけは非常に好であつた。自分の小児時代が恐らく風の全盛時代であつた様に思ふ。そこでからめ合の風は多くは小さいものだ、輕快にして操縦自在のものでなければならぬので、十六枚

富豪の多く住居した所で、風を揚げるにも越後中屈指の場所となつて居たと思ふ。殊に富豪の多い爲め、非常に大きいものを飛ばすを誇りとして居て、殆んど今日の人達の想像のつかぬものであつた。現に自分の家にあつたものゝ如きは百枚張と號したものであつた。兎に角百枚規模のものになると、奉書大の極めて堅固な大谷地と稱する紙を用ゐたるものだ。此は自分の家計りでなく、豪家で玩んだものは皆百枚に近いもので、アノ家には百枚張があると云ふ事が譽れとなつたものである。其心棒になつて居る中央の骨は、直径一寸五分もある大竹で、従つて其糸は直径の七分位ある細で、之れを飛揚するには一人や二人の操縦にては不可能であるから、壯丁の二三十人もかり、且つ轆轤を用ゐて上下すると云ふ様な騒ぎであつた。

○今日から考へて見ると實に不思議に思はれるのは、アノ狭い町でよく揚げた事である。現に自分の記憶に存する處に依



れば、町の中央に揚げられて引下す時、誤つて有名な薬種屋の屋根に落ちて、屋根を毀つた爲め、散々苦情の起つた事がある。如斯水原では富豪の多かつた爲め大風が名物であつたが、風の産地として越後國中で名高かつた。一六と渾名のついた風屋があつた、之れは二三代も續いてやつたものと見えるが、製作が丈夫で、殊に繪に妙を得て居つた、自分の小兒時代には、女亭主であつたが、それで武張つた繪の如きは實に巧みなもので、他より来るものに數等勝つて居た様に思ふ。要するに現今交通の發達著しく、人馬雜踏の市街地に於ては風も揚げられまいが、空地の澤山ある地方に於ては、風の遊びの如きは頗る勇壯なもので、獎勵して差支へないものであると思ふ。

○越後出身者の中で自分が平生畏敬の念を懷いて居る一人は小西信八氏である。

▲小西信八氏



○會て自分は馬琴の遺墨を蒐めて展覽會を催した事がある、其初日の開場第一に刺を通じて自分を訪ねて来た人が即ち小西氏であつた、自分は其名聲は聞いて居たが此時初めて逢つて見ると如何にも温厚篤實で、成程此人にあらざれば盲啞教育など云ふ骨の折れる慈善的事業は出来ないと感じた。

○殊に馬琴の展覽會に臨むだといふ事に就て一種の感に打たれた、それは他ではない、誰も知る通り馬琴は晩年失明して盲人となり猶致々汲々として八犬傳の大作に努めて終に完成した、小西氏が特に開場券頭に此陳列を觀に來たのは恐らく盲目なる馬琴に同情を寄せて來たのではあるまいかと則ち自分に考へ、一層小西氏の人格に對して畏敬の念を深うせざるを得なかつた。そこでいろいろの話を末に自分は此事に言出した處が小西氏は笑ひながら、そう云ふ意味もない譯でもないが併し貴君がそう云ふ事に直ぐお氣の付くと云ふ事も盲人に對し同情があるからであらうと信する、第一今日の御陳列は盲人教育に就て誠に結構の事と考へます、甚だ突然のお願ひではあるがどうか私の學校へ來て盲生に對して一場の講話が願はれまいかとの請求が起つた、自分は之に對して私は盲人教育などに就ては一向素人であるから講話する様な材料は持ちませんと辭退に掛ると、イヤ馬琴の話が願ひたいと云ふ、然らばと云ふ事で自分も承諾し、四五日経つて盲啞學校へ臨んだ。

○小西校長は喜び迎へて講話の前に自分を各教室に案内して觀せられた、其時自分が頗る感じたのは校長は各室へ這入ると同時に盲人に對しては口づから自分の職名姓名初ては今日學校へ臨んだ事など極めて懇切に告げられ、嚙生に對しては黒板に自ら自分の名刺の通りの文字を書

いて平生をして傍へ假名を付けよと命せられ一々教室を參觀せしめられた。應て自分は講演に臨んで、馬琴が盲目に及んで猶一代の著作を完うしたる事蹟を詳しく語り、最初盲目になつた時は長男の末亡人を相手に字を教へながら教授して筆記させた困難は實に非常なるものであつて、其嫁が時々泣出す、餘りの氣の毒さに堪へ兼ねて一層筆を絶たうかと考へた事も幾回となくあつたと云ふ事が馬琴自身の手記に遺つて居ると云ふ様な事を語り、要するに失明後の八犬傳十冊と云ふものは全く涙で書いたと云ふものである。世には一字千金と云ふ形容詞があるが、失明後の八犬傳こそ形容詞にあらざるに全く一字千金の價値ありと述べ、更に境嶺校の事蹟にも及び、境は盲人であつたが目明よりも偉かつたもので、番町に住つて居る時分目明は皆此盲人に學むた、そこで一番町に目明盲人に物を問ひ」と云ふ落首があつた位で、盲人は大切な機關を失ふて居る代り却て他の官能が發達するものであるから、盲人に偉い

ものと出る事は怪むに足らぬ。諸子もして盲人であるからと云つて失望するに及ばぬ、奮勵すれば馬琴、境たる事必ずしも爲し能はざるにあらずと云つて、一時間計りの講演には頗る感動を興へたらしく見えた。

○講演が了ると校長の指圖で或盲生が壇に登つて點字に作つた一冊の本を朗々と讀み初めた、それには自分も實に意外なるに驚いた、自分は馬琴に就て只断片的の話をした位なのに、此讀むだ點字の書物は疑もなき八犬傳で二三頁計り私に讀んで聞かせた、あとで校長に聞いて見ると、アノ大部の八犬傳が既に八分通り點字に作られて居ると云ふ事で、自分では盲啞教育が斯く迄の進歩を呈したるを驚くと共に、更に其の此に到らしたる小西校長の絶代の努力と人格に對して一層畏敬の念を増した譯である。

雙魚堂閑語

初對面錄 二十

東京

朴泳孝侯

○此頃の御大葬に朝鮮の王族と同伴して來た朴泳孝は、今日では日本の侯爵であるが今より廿三四年前は金玉鈞等と亡命して日本へ逃げて來たものである。慥か朴が來てから三年計りの後と思ふ、或念の頃我々は二三の友人と誘ひ合せ大森、浦田あたりへ觀梅に出掛けた事がある。其際新橋から汽車に乗込むと折節朴泳孝が二三人の書生を隨行せしめて同車した。朴は其當時は年齢もまだ廿歳少し越した頃で、如何にも容貌風采の秀麗な優形な色白の人で、一見名門の貴人であると云ふ事が誰の眼にも映する位である。無論

主従とも洋服の打扮で、大きな瓢箪を携へて居つた。

○其際は話も交へなかつたが、初て大森から降車して二三ヶ所の梅園をあらちち逍遙して居ると、朴氏一行も同じ目的で出掛けたので、例の瓢をぶらさげながら方々に出會す譯で、遂にいつしか語を交ゆる様の事となり、互ひに名刺の交換をした、之が朴を知るの初めであつた。併し歸りには別々になつたのであるが、それが大森停車場へ來るとまた出會した。

朴氏一行は其携へる大瓢を傾けて大に煽つたと見え、朴先生の如きは醉態淋漓と云ふ有様で仲々の大元氣、亡命など云ふは何處吹く風と云ふ態度で、待合室の大机の上に攀ちて横臥をして居る。

○自分等の一行も少しく酔前の場合であつたからまた其所でいろいろ話すと、一所に歸らうと云ふ事で同車した、車中朴氏の云ふには、新橋へ着けば日も暮れる事であるから何處かへ行つて一杯傾けやうぢやないかと提議したので、自分等も賛成し、新橋へ着ると共に或る西洋料理店へ出掛けた。之は朴氏の懸念な處と

見えて、朴氏の側が何となく主人振であつて、到々朴氏の御馳走になつたが、其際は主客既に酣醉の境に入つて居るので互ひに遠慮會釋なく政治論などを闘はした。當時朴氏は日本語の操縦が出来ない位であつたが、隨行者は如何にも巧みに操縦するので、之を介して我々も巧みなる事を論じ、議論に花が咲いて夜の更なるをも知らなかつた事がある、之が朴氏に會する發端である。

東京

康南海は支那の革命の首魁で、或意味に於ては維新の元勳より先きに勤王の議を唱導したる竹内式部とも云ふべき人で、力はそれより一層上の人である。

此頃南海が久し振で來朝したので、我々同人之れを迎ひて一席の宴を張つた、元來康有爲は一種見識のある學者で、無論考證學者で、曾て『偽經考』を著し眼光徹紙背的の眼を以て經書の偽作を論じ學界を驚かせ、後『制度考』を公にし大に世の經論家に知られた程の學者であるから悲歌慷慨徒らに氣を負ふのみの人ではない。大に張之洞に知られ、次で先帝に愛せられ、萬事直奏し得らるゝに至り、支那の維新を企つべき一刹那、竟に蹉跎して萬死の裡に一生を免かれ爾來亡命の客たるとは誰もよく知る處である。自分は前年も逢つたが、今度復た之れを見れば相變らず健全にて、眼光に一種の凄味を有し、一見異彩を放つて居る。當日は懇意同士の席なれば互ひに城壁を設けず驩飲談笑した。席上南海の語る處に依れば

「と云つて笑つた。明治十五年と云へば早稻田大學などの初めて起つた歳で、我邦の文物も未だ幼稚の時代であるのに支那に於て早くも文明の學問に志したと云ふは餘程の識見を有するものたるは、争ふべからざる處である。南海は屢々外國に遊び、足跡歐米に遍しであるから今日では餘程世界の大勢にも通じて居る。そこで同人間に南海に比較すべき日本の人物は誰かと云ふ問題も出て、維新の志士中の甲乙丙丁なども物色して見たが、南海は彼等の凡てを合せた様な人物で、何うも維新の當時には單獨にキツパリ築くと云ふものがない。吾輩は此時フト

新井白石と似て居る様に思はるゝので、試みに兩々比較し來りて同人に語つた。蓋し學識豊富の點に於て、誤謬多き舊説を論破して新見地を開拓したる點に於て文章の巧妙なりしに於て、制度に精通し自己の考案に新規模を出すの點に於て、抑々白石が時の將軍家に知られ言ふ所多く用ひられたる、南海が帝者に親近せられて其説に耳を傾けしめたる、兩々相比較し來れば、國を異にし時を同うせざる相違こそあれ、如何にもよく類似して居りしはせぬかと評した。スルと或一人私語すらく、君の説適切なるもの多し、只一の大なる相違は、白石の貧乏なるに似ず南海は富饒の如きものを作り大金を贏け目下鉅萬の富を擁する事であると云ふ。吾輩對へて曰く、然らば、是れ日本人と支那人と違ふ處である。併し白石は貧乏ではあつたが、財政經濟の道には通じて居たのであるから、必らずしも絶對の相違ではない、など傍若無人に評論し、夜を深うして散した。南海は近來之れ程愉快な會に臨むた事はないと云つて、席上

興に乗し十數枚揮毫して同人に頒つた。思ふに支那の議會に於て、既に南海を特赦すべしとの建議案も通過してあるが、保守黨の一部から西太后の肉屍未だ冷かならざるに、康有爲を赦すは少しく穩當を欠くと云ふ説もあり、其儘になつて居るのであるが、併し渠が赦されて歸國する日は、前途差程長い事もあるまい。



行つた事がある、其折誰か一人仙臺平の袴を穿いて紳士らしい中年位の人が見え、先に行つて居る人が居る、自分も誰とも気がつかず隣り合つて追々見て行くと、此先生

客の去つた後に其所に置いてある名簿を見たと『堀越秀』と署名があるのので、ア今のは團十郎であつたかと判つた、その判つて見ると一種の興を覺えるのは此先生頗る香道に熱心で、一ヶ月香屋へ拂ふのは何百圓にも上ると云ふ話も聞いて居たので、特に蘭奢待に對して執拗い質問をしたのは、成程此に興味があるからであらうと感じた。

市川團十郎

○奈良の正倉院は帝室の寶庫になつてから段々取締が嚴重になつて今日では殆ど普通人の拜觀は出來ぬものとなつたが、一時は或る若干の金を包めば誰でも觀られる時があつた。

○往年奈良へ遊んだ時に自分は其一覽に

○舞臺上で觀た團十郎は久しいものであるが、素顔で逢つたのは之が最初でまた最後であつた。あとからアノ時早く團十郎と知つたらまだ他の事にも渡つて談話を交換したものと頗る遺憾に思ふ。

近衛篤磨公
○今は故人となられた近衛公は何人も知る如く關白家の系統を引いてゐる人で日本に於ては最も門閥の高い名門である。曾て或人が篤磨公の先代即ち近衛の老公を訪問し、その談話の中に源平時代の歴史談に入ると、其人は不用意に平清盛

を清盛々と云てゐると老公には清盛の事を「相國殿」々々と言はるとのを聞いて成程其様の家柄の處へ来ては清盛など云ふては宜しくない、清盛も近衛も相國家であるからには相當の敬語を要する事である、且つ老公の種々なる談話を聞けば歴史上の大名門家には近衛家の親戚に當る人が多い、そこへ行つて歴史中の人物であるからと云つて無暗に呼称杯にしてはならぬと氣付いたと云ふ事である。近衛篤磨公には自分等はあとから懸念になつて友人あしらしをした者であるが、よく考へて見ると關白家で日本の名物の一であるから其友人扱ひをしてゐる場合にも、俄かに態度を改めて敬意を表した

りするが如き滑稽もあつた。
○公に自分が初めて逢つたのは麹町の邸に居られた時と思ふ。自分の友人の方が以前から交つて居た關係から其友人と同じ伴して謁した。豫て公は相撲好であると聞いてゐたが、應接室に通つて見ると此は日本室にテーブル椅子などを按排したもので傍らの卓には成程相撲好の看板が

々嚴然たる處があつて、其門閥相當の威嚴には幾ら懸念の者でも自然に尊敬の念が起つて来る。甘貫にも餘る体格にて容貌頗る秀麗で、しかも凛乎たる氣魄が何處となく存して普通の華族を見ると大に趣を異にしてゐる。殊に公卿華族と云ふものは何となく薄弱な處が容貌の上に顯はれてゐるものであるが、此公卿に於ては一點弱々しい處がなく、仲々壯健な人で洋服を着けるにも平素洋袴下を穿かねと云ふ人であつたのに、一朝二疊の肩す處となり登世せられたるは知人計りでなく國家の大損害である。
○日清戦役の當時廣嶋に議會のあつた歸りである、我々は京都に立寄つたが態と校書杯を聘して遊べる様な宿を撰んだ、其時公卿は華族相當な伎屋に居らると聞き、定めて窮屈がつて居らるとに相違ない、此へ招いては何うかと云ふ動議が起り、使を走らせると直ちに來られた、實は甚だ困つて通出したいと考へてゐた最中の處で誠に難有いと喜ばれた。此方ではモウ氣を利かせて公卿の愛妓を迎へ

てある、此妓もまた公卿相應の品のよい女で、京都式の型に一層足をかけた様な端然としても一言半句も口をきかぬと云ふ美人であつた。そこでいたづら者が上座の公卿の席に強て其美人に蒲團を並べさせ、我々は故らに未席に座し一同敬禮をして、今日は關白殿下並びに御臺所まで御來臨を辱うし恐悅至極に存じ奉ると云つて、主客共に笑つて一夕の歡

を極めた事がある。其時公も大に興がられて遂に御秘藏の唄を拜聴するの光榮を得た、それは實に一つとやの手毬唄であつた。

井上、大隈の話で思出したが、茲にまた一つ面白い話がある。ソレは凡ての元老連に關係のあるとて、其關係者の一人たる大隈伯自身から親しく聴いたのである。何分元老連も當時は若盛りの人々であつたから、種々の奇談もあるが、扱念よ江戸城に於て維新の假政府組織となり、其爲に登城すると云ふ場合になると、大臣參議の面々、昨日迄は白面の一書生であつたから、何れも短褐破袴と云ふ扮装で、中には馬のあるものもあつたが、多くは乗物なし

と來て居るから、大概徒歩で登城すると云ふ、一國大臣參議も、已を得ざる場合とて、見開い爲体であつた。
●スルと此時江戸城には、美少年の給侍が澤山居つたが、之等の多くは旗本とか何かの身分良き子弟で、ソレが幕府の時の型で駕籠に乗つて登城をする
と云ふ譯。即ち給侍は駕を命し、大臣は徒歩で行くと云ふ前代未聞の奇觀を極めた。夫から此參議連中は、當時未だ妻君等を定めぬものが多かつたが、追々は其撰定もやらねばならぬと云ふ様な話も出て、美少年の給侍の中の、目覺しい奴を呼んで、「お前には姉様が
あるだらう……夫は獨身か縁付たか……縁付先は何處だ」と云ふ様なと迄穿鑿したもの
との話でだあつた。實に當時の有様が思遣らるゝてはないか。

篆刻家大迂翁を訪ふ

雙魚堂主人談



○我輩は大迂圓山翁の門人を聊か世話をして居る關係から是非一たび訪ふて見たいと思ひながら數年志を果さず今日に至つたが、此頃京都に遊びだを機として一日訪問した。
○翁は浙派の篆刻大家で、浙派ではどうしても此人を推さざるを得ない。翁はしばし渡清して今より三十年前支那で名高かつた徐三康に就て篆刻を學びだ入である。日本に於ては無論徐氏の遺録を繼ぐ人は此人の外は無い。もと
は尾州の生れて幼少から篆刻に志し十七八歳の頃既に一家を爲す程に熟達したが、翁思ふに、いくら發達した所で日本在來の篆刻の圖内に踰踏しては到底

五十歩百歩で、一頭地を抜いた所で知れ切つたものと、断然志を立てて支那へ赴き、徐二康に學ぶに至つたとは翁自から云ふて居る。

○翁は本年七十二の高齡であるが今度遇つて見ると意外に若々と見へる人て談話の具合なや七十以上の人とは思はれない。人に對して城府を設けず、談笑快備一見舊識のごとき思あらしむる所、最も吾が意を得た。

○翁曰く、日本に於て書に害毒を流したるは菱湖で印に害毒を流したものは林谷(細川)である。林谷は健筆を旨とした爲めに盛んに片刀を用ひた、之れが爲め篆刻界は靡然として之れに赴き今に迫りても尙ほ片刀を用ゆるとがやまぬ。

○支那では流石に印刀の使ひ方が正し、どんなものでも中鋒を用ゆる。例へば城壘彫と云ふは、日本て云へば縁日商人のごとき者の篆刻である。印材

を賣りながら鈕や字を大道中で刻して居るが、そんな輩でも刀法丈は正しい必らず中鋒を用ひて片刀をつかはぬ。序に云ふ。支那の城址には必らず城壘廟と云ふ祠がある、それに印を鬻ぐ者が彫りながら賣つて居る、城壘彫と云ふは之れを云ふのである。

○翁又曰く、日本では古墨を珍重する。鄭氏の製墨などになると非常に珍重する。支那でも同様であるが、これは重みに骨董として珍とするので、實用の墨として珍とすべしや否やは疑問である。曾つて在清の折師に此の事を質したところ、師の云ふには、明墨は明紙明筆を俟つて初めて調和を保つもので今時の紙や筆で明墨を用ゆるは洋墨を和紙に用ひ和墨を洋紙に用ゆる様なもので、調和が全く缺けるから實用上珍とす可らずとの答を得たと語られた。

斯る處へ氣が付いたのである。世の金石を弄ぶの士は須らく翁の説に聽きよく翫味せば、必らずや得る所があふと思ふ。

○翁は篆刻の外畫をよくし、南宗派の畫家では今日翁の右に出る者がない。



篆刻家大迂翁を訪ふ

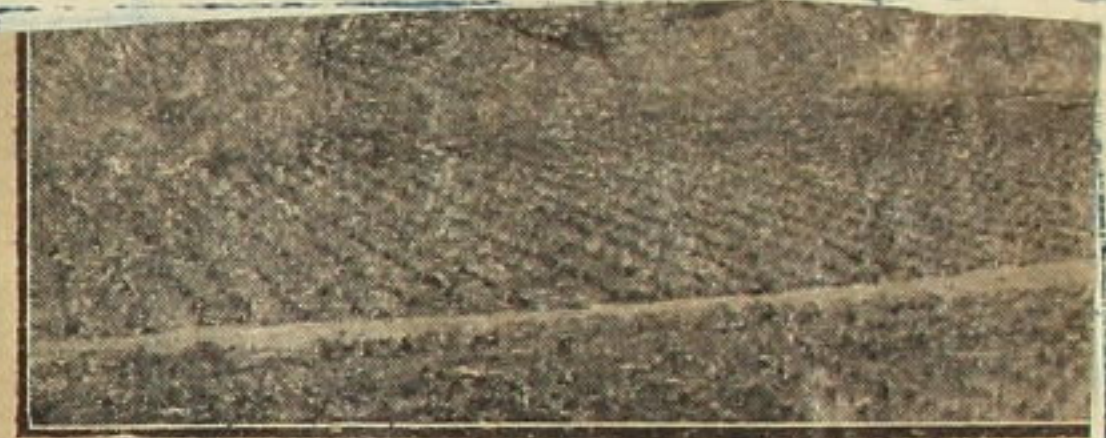
○翁は最後に得意の金石論を擧ぎ出された。これは翁が篆刻家として長く研究された結果である丈に傾聴の價があつた。翁曰く、今の人々は何んでも金石に刻した字は皆筆者の筆意をその儘に傳へたものと速断し、字を學ぶに根本と寸毫相違の無い様にと習らひ勉むるが例となつて居る。併し實は研究ものである。由來筆者の筆意や筆致を毫末も崩さぬ様に注意して彫る様になつたのは唐以來の事、所謂法帖なるもの、起つた後の事である。秦漢六朝あたりになると、書を傳ふるものは唯だ碑文に過ぎぬが、さて此の碑文の字は法帖を彫るが如く筆者の筆意を飽くまで逃つて刻したものかどうかと

雙魚堂主人談

紅蘭藝妓

○京都、三本樹に信樂と云ふ旅舎があつて、我輩も今より廿二三年前宿つた

とがある。此家は小館旅ではあるが可なり古く、且つ鴨川の清流に臨み、近隣の家屋多くは舊名家の宅であつたと云ふ處から、相應に名が開えて居る。即ち東隣は貫名海屋の妾宅、西隣は梁川星巖の舊居であるが、海屋の妾宅と云ふはなかく

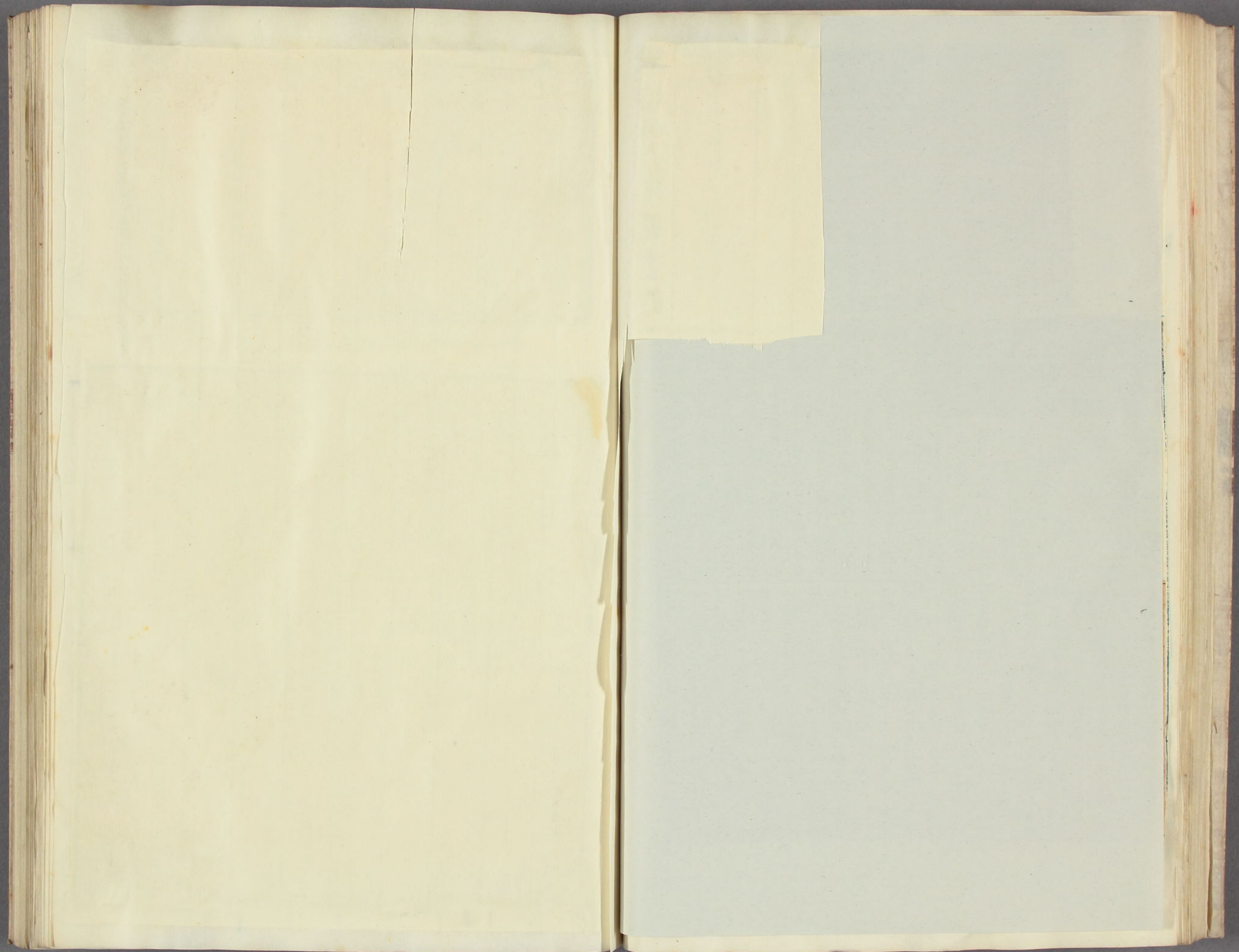


「妾の年若の時分、星巖先牛は始終妾の處へ遊にお出になりました。先生の配偶の紅蘭といふ人は誠に嫉妬深い氣六ヶ敷い性質で、三日にあげず夫婦喧嘩をして箆筒を持出す様な騒ぎは珍しくなかつたのです。それで開んな騒ぎの起る度毎に先生はいつも負けて妾の處へ逃げてお出になつた」と話す。また其後我輩の友人に、紅蘭のどに就て詳しく知て居るものがあつて、我輩に聞かせた中に面白いと

○紅蘭はもと藝妓であつた。素より筆蹟も一寸見事であつた。多少の學問もあつたので星巖の室になり、夫から書、畫詩等に就て世人の賞賛を受けた譯だ。處が其藝妓時代に星巖の友人中に契を結んだ關係者もあつて、其一人は菊池五山であつた。是は紅蘭の最も秘密にして居た處で、同人も多く知らぬ事實である。乍去日には知て居る者もあつて、例の夫婦喧嘩を初め紅蘭の亂暴狼籍を極めると、某の友人が出掛て行つて「ア、秘密を話すぞ」と云ふと、流石の荒神も靜つて終ふたそうなる。○元來紅蘭は肥滿の女である處へ星巖が瘠つぼちと來て居るから、夫婦喧嘩を初め組打をしても星巖は敵はなかつたらしい。加之、星巖の境遇は所謂紡文績詩で、聊かの謝儀を得る働さへなかつたに引替へて、紅蘭は女流だと云ふ譯から、京都宮家の姫君あたりに書畫の指南をして、扶持を貰ふて居り、

早稲田大學圖書會

叔入は星巖に比して遙かに多かつたので、勢ひ女權が擴張されたのであると思ふ。兎に角紅蘭と云ふ女はさかぬものであつた。(姫峰記)





雙魚堂主人談

碧雲莊

○松原新之助と云へば誰も水産家の泰斗だと云ふが、併し事實之許りてはなく本人仲々種々なる方面に道樂を持ち極めて文雅な人である。殊に不味流の茶道に於ては、君は不味の國に生れ門閥家である關係から、先代より之を傳へて即ち茶道に於て家元である。今日不味流の茶道を傳へて居るものに、廣い東京でも山谷の八百善の外は殆どない、然るに其家元が松原新之助君なるとは記憶せざるを得ない。

○此頃の事、同君の新居が出来たと云ふので招かれた。成程庭園其他の結構

は趣味に富んだものである。殊に頗る感興を催ふしたるは不味が自ら指圖をして作つたと云ふ茶室が本國にあつたものを、物故つた岩崎彌之助君の好意に依り、壁土に至る迄運搬し來つて庭園中に具合よく置かれてあるとだ。

○此茶室は「明々庵」と稱して居るが如何にも不味翁が意匠を凝らした様は水屋を見ても分る。之は普通のものとは違ひ、餘程手廣く出来て居り、其隣つて居る茶室に、低い袋棚と云ふものを経て出物が水屋から直に茶室に運ばれるなどは意匠が見える。何にしても天井を毀たずして其儘運搬して持て來たのだから、もとの面目を損せずして出来て居る事などは頗る興を感じた。

○いろ／＼の末、主人曰く、碧雲莊と云ふは或禪僧の文章から取つた名であるから、園中の種々なる部分に命名しやうと思ふ。就ては可成同文章から取つて見たいと云ふので、相談を受けたが其名は

西來橋、瀨一泉、漫々逕、藏海鳥、と云に様なもので、何れも禪味を帯びて面白。

○最後に主人は其近作をも示されたが詩も仲々面白い松原君は水産家として又茶道の達人として一家をなすに止まらず、詩に於ても確に一見識を備へて居るものである。

碧雲莊

購宅青山隈。幽邃適吾意。解衣時盤桓。公退閒無事。家山一茶寮。藩公所曾置。水陸勞轉搬。修葺漸已備。晨嗽一瀉泉。花影游魚戲。夕步漫々逕。雙松起清吹。聽泉忘心機。倚松堪坐睡。木石多珍奇。遠辱故人寄。樹深藏海鳥。晨夕嵐氣翠。偶上西來橋。恍作濠漢思。蕭然小茅庵。門題明々字。千里碧雲湖。長房今縮地。品水靜對茶。禮法傳古義。可以參真禪。可以厚友誼。主客談笑中。道腹存至味。百歲拜君思。此樂天攸賜。

庚戌春日 瑜洲主人 松原新誌

(五)

彰考館の書庫を觀る

雙魚堂主人談

水戸の義公に依て企てられた修史事業即ち大日本史の事業は何人も知て居る處であるが、之れが全部を完成するには二百五十年の歳月を費し、近頃に至り漸く完成した譯で、其の年數から見ても日本に於ける編纂の事業である。而して此の國史の編纂所たりし彰考館は歴史上著名のもので、従つて其の参考書を藏してある、書庫もまた有名のものであるけれども、如何にせん從つて深く鎖して内部を窺ひ知る事が出来なかつたものである。然るに幸ひにも自分は近く或る機會を得、親しく其内部を一覽するの光榮を得、大に趣味を感じたるは欽ぶべき事である。書庫は彰考館に附屬のものであるから、常盤

公園の附近にあるは言ふ迄もない、元より公開でも何でもないから舊式の塗込めの土蔵造りで、其の中に在る所の書物は約三萬を數ふ。現今の圖書館の設備に比すれば三萬巻は格別大なるものではないが、併し其の圖書は悉く選擇を経たもので、時に大日本史の史料に關係するものが大部分を占め、世上稀覯のもの三萬を數ふる事であるから、非常に貴重すべきものである。書庫には彼の朱舜水が本國より齎らし來り日々愛讀せし遺書嚴然と十數函存し、即ち舜水が用ひた儘の函に取められ、其書には舜水自身の書入等あり凡て手澤を経たるもので、之れだけでも全く珍とするに足るものである。其他現今の早稻田大學長の高田君の先代小山田與清が半生の力を盡したと云ふ「擁書樓」の藏書として學界に名の聞かえた書物が幾んど萬を以て數ふべき程嚴然として存してある。或は義公の當時當代知名の學者即ち三宅觀瀾、安積澹泊の如き鴻儒を集めて書せたもの、若くは水戸出身の幾十の學者が自から書いたもの、筆を

入れたと云ふ様な書物が澤山此に藏せられて居る。加ふるに當時世に秘せられて居た古書を限なく搜索して寫取つた寫本などが皆此中にあるから、實に大なる寶藏と云ふべきものである。書籍は昔は一々書函に入れて棚に上げてあると云ふ遺口であつたが、斯くては蠹虫の患ひあるのと、出入れに不便だと云ふ處から、近來西洋式に改め、總て函を取去つて棚の架上に整列してある。但書籍分類の仕方は舊例に基いて居る。即ち支那の本は八卦に象りて八種に分類し、日本の書物は十二支を標準として十二種に分類してある。庫は日本式ながら、内部の様子を見れば圖書館の趣きをして居る。もとより澤山の書物であるからトテモ短時間には色々のものを見るには出来ぬが、此時示されたもの十數冊中最も興味を感じたものは大日本史の原稿である。

凡七〇



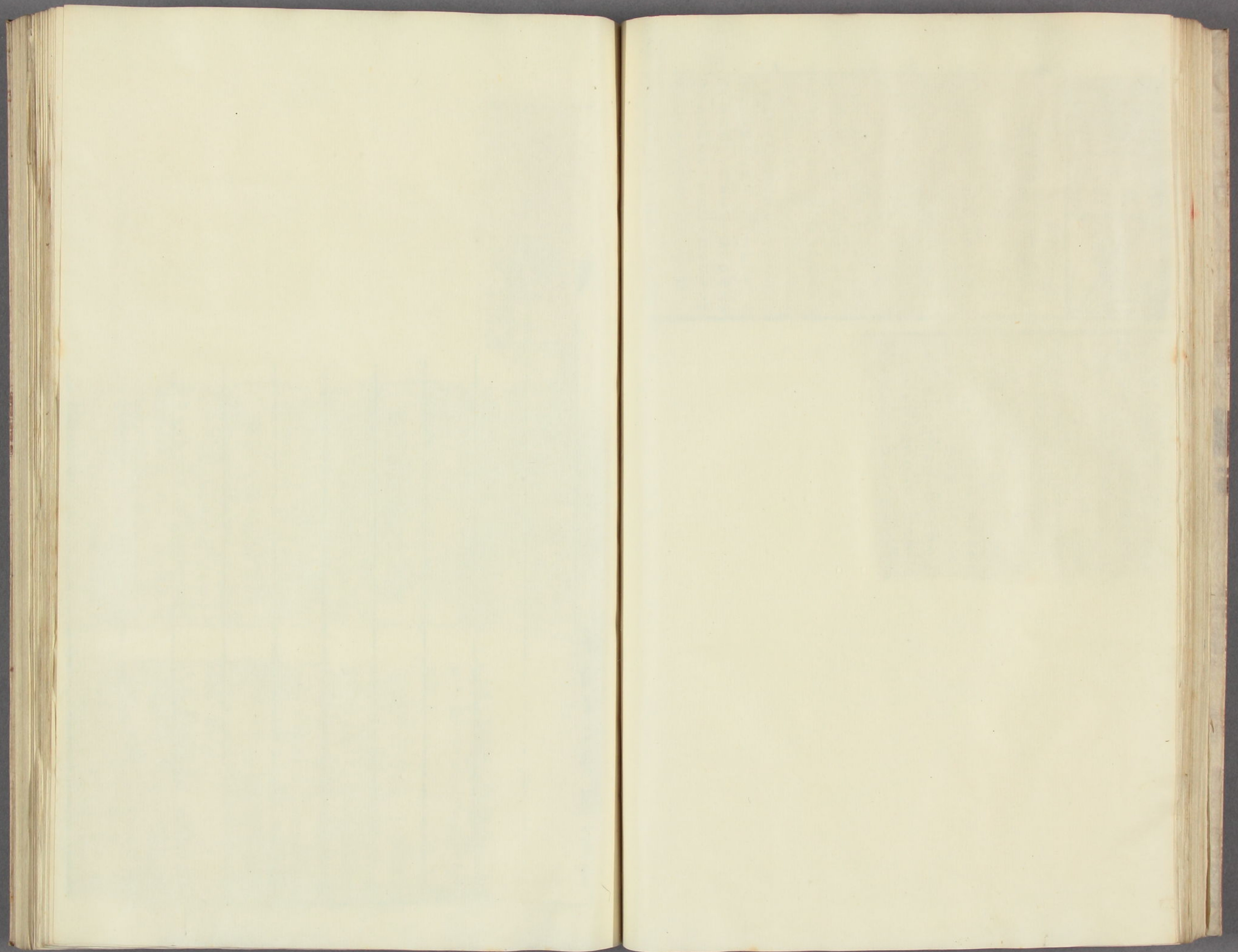
雙魚堂主人談

彰考館の書庫を

観る (下)

大日本史の原稿は實に澤山のものであるが、特に興味を感じたものは今春非常の騒ぎとなつた南北朝正閏問題に關係するもので、之れに附帯しては楠公正傳等である。水戸にて修史の當時之れに最も大刀を注いだと云ふ事は、其の原稿の莫大なる點に於ても認むる事が出来る。楠公の部分の如きは五六種の別々の原稿があつて、之れを見ると多くは無野の美濃紙に書いてある。殊に初頁には有名なる安積澹泊が縦横に雌黄を加へてあつて、それへまた義公が自筆を以て多くの指定をしたものがあり、また種々なる自筆の附箋をしたりして居る。之れに依て見ると

義公は常に此編纂に臨んで親しく之れを總攬したもので、今日何々の編輯總裁とか名計りで一切他人任せの如きものではなく、一頁にても苟くもせず、一々意見を附してある所杯は恐入たものである。また其の意見は頗る面白い所があつて、何れかと云へば見識は確かに義公の附箋にある様に感ぜられ、言ふに言れぬ味ひがある。若し此五六種の原稿を彼此對照して見たならば一層興味を感ずるであらう。試みに其の附箋の例を擧げて見るに、之れは源頼朝の時分の頃で、例の富士の牧狩の條を讀んで見ると、原文は漢學者



坪内逍遙君と語る (元)
 ◎義經辨慶の事跡
 日本の社會に軍記や軍事物語が大勢力を

有し我上下を擧げ、就中少年の思想を左
 右せしやに就ては、今日尙此の勢力の没
 せざるに見ても知るべきである。其中殊
 に勢力あるものは源平の事實で、源平の
 事實中最も歡迎せらるゝは義經辨慶の事
 跡であるが、それが如何なる原因である
 と云ふ事に就て、曾て逍遙と研究した事
 がある。元來義經辨慶の事跡はよくも子
 供の同情を惹くべき様工夫されてある。
 先づ幼少の牛若が鞍馬に劍道を學び、幾
 多の艱難を積むで **仇家に報復**を
 圖ると云ふ事が既に子供の同情を惹くべ
 き立派なトラジデーである。しかも尙ほ
 此上にも子供の同情を惹かんとて工夫さ
 れたるは辨慶と云ふ大坊主を之れに配し
 た事である、當時佛者の勢力は非常のも
 のであるのみ、此勢力ある大入道を心服
 せしめ其の臣従と爲す所は、これ子供を
 して **お山の大将** 吾れ獨りたらし
 むる所で、況んや辨慶に少しく水滸傳的
 趣味を加減し、五條の橋に一木齒の高足
 駄を工夫せし處など、子供をしてヤンヤ
 と云はしむるの妙を得たものと云はざる

を得ない。これが小兒に歡迎せらるゝ所
 以である。
 ◎一は衆道の上から
 然れども歡迎するのは敢て小兒計りに限
 らない、堂々たる六尺の大丈夫も亦之れ
 を歡迎する所以は如何、それにも原因が
 ある。それは **全く男色** の上から
 來たものと思ふ。徳川時代元祿の頃に
 は **花の如き美少年が鬼** のこと
 奴を伴ひ、其のコントラストより一
 種云ふべからざる美觀を呈した、想ふ
 に當時の男色家は之れを見て魂飛び神銷
 するの情があつたであらう。而して義經
 辨慶の配合は、偶然美少年と奴の配合に
 よくかなふて居るから、錦繪などの發達
 と共に義經は益々美少年に畫かれ、久し
 く好色家の注意を惹いたのである。

意外録 (元)

東京 春城學人談
 樹生筆記

山内容堂と三
 條公

十佐の山内容堂侯はなか／＼の政治
 家であつた、十佐では後藤伯を始め
 多くの政治家を出して居るが、當に
 殿様であるからと云ふ許りでなく、
 實際手腕があつた、侯が内閣で何か
 三ひ出すと容れられる迄動かない、
 時三條公と何等か衝突を起したこ
 とがあつた、容堂一議論を試みよう
 と云ふので、公の邸を訪ふた、公は
 温厚の人であるから容堂の見幕を恐
 れて不在と號した、處が容堂は内々
 此事を感附いて居るから留守と云ふ
 ても戻らぬ、偶々公の母堂が山内家
 と親戚である關係から、主人不在な
 らば母堂にお目にかゝらんとゾカ
 く／＼と通り、母堂に面會して、公御
 不存と承るが、歸邸まで御待ち申
 さんと、特に公の隣室に陣を取り、
 いつ迄も動かぬ、公は便所に行く通
 路を遮断せられて當惑し、終に兎を

脱いで現はれ出で、容堂に論破され
 たこともある。

故小野梓君が我帝國の憲法史上に偉大の功業を成したることや、立憲政治の發達に向つて其一生を苦心劇業が一つの皇子爵の遺傳中から自ら分小野君の熱意であつたものと耳

春城學人
シルクハット

にも始めて聞いた面白い事實がある
小野君は實に我日本の先覺者であつた、風に其行同樂なる團體を起して多くの學者や有志を集めて我國勢の進歩に向つて常に關心して居たのであるが、就中當時君の心を痛めたは國際的の對外條約で、一日も早く條約を改正し、帝國をして有利の地位を得せしめざる可からずとは、兼荷ぼ忘るゝ能はざる所であつた故に平生此説を絶叫して努力無くも止まなかつたが、一日俄然として同志に語つたには、今尙ほ條約の改正が實現されぬ原因は主として外人が日本を理解して呉れぬからである、即ち彼等は帝國を以て依然たる舊時代の野蠻國と同視して居る果であらう、然るに事實は近年日本の文明に赴いたことは我々自身と雖も驚くばかりで、理に此共存同樂の一團中にも彼等は一歩も譲らぬ程の識者ばかりで、澤山居るにも拘らず、彼等の誤解を受けて居るのは残念である、彼等をして條約の改正を請せしむるには、先づ以て彼等の事情を互に相知らしむべく、意志を疎通するが先決問題であるまいか、それには外人に向つて能に障壁を築かず、進んで親交を求めて接觸を計るがよからうから

先づ何處かで外人招待の宴會を開かなくてはなにか……と之が小野君の提議であつた。
小野君は更に先づ廣遠に居る各國領事或は大商館の歐人連を招待し、成續如何によつて幾回も此種の會合を續け其間に日本の國情を語つて條約改正の機を早めやうといふ提議で、理義極めて明白だから衆皆直ちに之に和したは可かつたが、サア其實行となると兵會場に困つて了つた。
勿論之が今日なら何にもソウ困ることもないが、何れ其頃はまだ適當の場所が無かつた、漸くのこと、今の十五銀行が其當時は一獨立派な建物に見えたので、一般會合の場所でないにも拘らず無理に懇願して借り受けた上、此時始めて西洋風のカナードで招待状を作り廻るハイクナ案内を出したものだ、一方外人連に於ても今迄東角自分等を毛嫌ひして居た日本人の方が發起して招待して呉れるは破天荒な事だけに頗る興味を社會に興いで喜んで之に應じた。そこで一同發して其當日やつて來た客の中には某國總領事ヴィンセント・エーレンなどといふ其中の大賓も見え、邦人中には小野君や馬場辰猪などの外國語を喜くするものもあつ

たので英佛語で時事を談し日ノ日本國民の進歩から條約改正の義務を説き御客連中も大分感動した体で先づ(意外の成功を収めたが、それが)閉會して賓客が歸るといふ時になつて僅このことで失敗に終つた。
①といふのは而も正装たるヴィンセント・エーレンのシルクハットが恣難に推つて居た……といふだけの問題だが此事に似て必ずしも此事で無いどころか、實は此だしき失体であるのみならず、日本人を理解させようといふ此場合の出来事として特に取返しつかぬ不始末であつた、日本側は赤面し外國人側は變な顔をする、何となく白け渡つて物別れとなつたが翌日主人側を代表して金子爵が慫慂を續言まで謝罪のために出向くまでに、小野君其他は邦人の一大面目問題として騒いだものだ。
此以後、小野君の失望は言語の外で「まだ」條約改正の前途は遠い日本人も之では困ると長歎して「休んぬるか」と言ふ風なつた唯一箇のシルクハットの紛失が、小野君をしてイカニ憤慨せしめたことであつたか、實に想像の如であつたが同時に此一事を以ても同君が常に深く風事を憂ひて居たことも亦容易に推想し得られるではないか

四十一年前の布告

▲ランプ取扱心得の布告 石油燭たる
 越後の讀者に、多少の興味を喚ばしむ
 可き話がある。左に示すのは明治五年、
 東京府廳から府下に達した布令文の寫
 してあるが、今日之れを讀んで見ると、
 なかく面白。當時は泰西の輸入
 事物、吾が邦人に目新らしきものが多
 く、取扱ひ方も無經驗であつたから、

役所の布令などの内には、今日の商家
 の廣告の如く、携用法や注意を細かに
 載へたものが多かつた。當時社會の幼
 稚のさま以て見る可しである。
 ▲洋燈掃除は必ず盡の事 扱て其の布
 害といふのは斯うである。
 一、石臘油を混合したる石炭油は火
 災を醸成候に付右等の者賣出さざる
 様に渡世の者へ急度可申渡候得共
 猶氣を附け下直の油は不良の油と心
 得求む可事
 一、ランプを掃除し油をつぐは急度
 盡に致し置く可し、夜分火の近き處
 にて取扱間敷事
 一、ランプ並に油壺を火の近き處へ
 置く可からず
 一、ランプは全く石炭油計りを焚く
 器なるが故燈心管甚だ太し若し細き
 燈心を用ひて火を點する時は空氣入
 込み破裂し火災と相成可申事

一、石炭油を衣服足袋にかけ或ひは
 ランプを取落し又轉倒するに依りて
 其油、疊又は敷物に染込み遂に火を
 傳へ火災と相成可申事
 一、萬一燃ゆる時は風呂敷又はケツ
 トの類を以て押消す可く水を注ぐ可
 からざる事

牛肉の話

日本では昔は佛敎等の關係上、餘り牛肉
 などを食はず、多く食ふ様になつたのは
 漸く維新後の事だ。併し昔とて絶對に牛
 肉を食はなかつた譯ではなく、殊に水戸
 公も佐久間象山も大好物であつた事は、
 一は梁川星巖の筆記、一は象山自身の書
 簡中にある。象山は西洋の事情に通して
 居たから、盛んに肉食をやつて居たもの
 であらう。試みに筆記と書簡を掲げて見
 やう。

梁川星巖筆記の一節

水戸老公最も牛肉を好み玉ひければ年
 々寒中には産根より献する事なりしに
 直弼家督は是を献せず其故は直弼元
 坊主になり居たる事とて禪學を信じけ
 るゆゑ牛を殺す事を禁ぜしなり然るに
 公には是を知らせ玉はず其年庚申に庚

を遣はされ毎年相樂む所今年參らす何
 卒贈らるべしとありしに彦根答へて今
 年より國中牛を殺す事を禁じ候ゆゑ御
 斷り申上候ふと云ふ公又御使にて仰せ
 られけるは國中牛を殺す事を禁じたり
 とあれば是非に及ばされども是を年々用
 ひたる事にて殊に江州の牛肉は格別の
 事なれば我爲めに別段調へられ度願む
 なりとありしかど彦根承知せずしてつ
 ひに御斷り申上ける云々
 佐久間象山手簡

(前略)被寄思召候牛肉一箱御贈被下珍
 感殊に深く奉多謝候折節先年西洋書
 の句讀を授かり候當時加州候の醫官黒
 川何某入來に付御贈り被下候肉を炙り
 酒を勸め候所ケシカラズ賞美致し大に
 興を添候義にて千萬奉感銘 候然ば
 此紫菜珍らしからず候へ共聊か寒候御
 安否拜伺の印し迄に掛御目候御笑留被
 下候はと可爲大慶過日の拜答タマモノ
 ノ拜謝かた々草々如此に御座候乍
 憚御尊大人へも宜く奉願 候以上
 十二月十二日
 桂林實友 足下
 啓再拜

雙魚堂録話

雙魚堂主人談
◎大隈伯の灰殻説

嘗て大隈伯と旅行の際に、汽車中の徒然に、種々の談話が出て、偶々灰殻の文字に及んだ。伯曰く「大久保や木戸や後藤(象二郎)などは維新のハイカラであつ

た。併し銘々に趣きは違つて居る。先づ後藤は大名的ハイカラとも云ふべく、衣服などでも白羽二重の上衣に黒羽二重の上衣と云ふ扮装で、虎を描いたモヘル(毛布)の上に嚴然と座し、極めて氣取る癖であつた。木戸は何うかと云ふに、之れは町人的ハイカラとも云ふべく、全体が大坂の鴉池あたりの型を取つたもので、衣服の如きも仲々に凝つたものを着て居た。大久保は何うかと云ふに、之れは武士的ハイカラとも云ふべきものである。先づ仙臺平の袴を折目正しく穿いて、威容を整へ、一日座すれば不動山の如しとも云ふべき態度である。それから差料の刃の作りの如き、純金づくめであるがそれを純金の様に見せぬ爲め、態と燻しをかけて置くと云ふ様な具合であつた。そこへ行くと吾輩や井上(馨侯)などは、マア書生カラーとも云ふので、一切向に構はぬ流義であつたから、此三人のハイカラを見ると小癢に觸つたもので、何かの機會には之れを打破する事に努めたものだとの述懐談であつた。

るのである。

◎築地の梁山伯

維新後伯は築地に住まはれた事にある。それは古い家ではあるが、もと大名かにかの邸であつたと見え、頗る宏大なもので、丸で大旅館以上の邸であつたと云ふ事だ。扱て當時の伯も仲々偉かつたもので、伯が例の流儀で来る者は拒まずと云ふ態度であつたから、天下の士雲の如く其門に集つて来た。伯は當時の實況に就て「吾輩の所へは毎日種々な人物が来て寮宿りする、殊によると数組来て中には夫婦者もあつた。それで此連中が何れも我儘者の寄り集りであるから、自分等が厄介者の癖に、厄介者が厄介者を引き居候が居候を置くと云ふ様な譯で實に大混雜のものであつた。馬の五疋か六疋は毎でも繋いて置き、飯焚釜の如きも一斗焚のものを三つ四つ並べて置く」と云ふ有様であつた」と謂はるゝのでも、其一端を推測する事が出来る、世に築地時代の梁山伯と稱するものは、實にこれである。

走馬燈



(禁傳説)
雙魚堂主人

▲大隈伯と語る (四)

◎井上侯も居候

此梁山伯のお客様の中には、現今の井上侯爵も居て、殊に何處からか婦人を一人連れて来て、それがまた仲々振つて居たと云ふ事だ。伯の口吻に依ると「井上が妙な女をつれて来た、之れは男装をして袴を穿いて居たが、扱て毎晩井上と喧嘩をして實に我々を弱はらせたネ」と云ふ。序だから云ふが、井上侯の現今の夫人は此女ではない、アレは其後中井弘の妻君を井上が何かの争情で娶つたものであるが、その際伯夫妻には是非媒妁人になつて貰ひたいと頼んだが、伯は前の夫婦喧嘩の例に鑑み「イヤ眞平御免だ、併し達と云ふならなら

支那書畫は贓品

支那に滅びてしまつた宋、元、明あたりの古書畫が、割合に日本には數多くある。其の多くは貴族の家に傳へられて居るものであるが、茲に疑問とすべきは、どうして斯様のものが澤山日本へ傳來したかといふことである。

日本には支那の高僧の墨蹟が、殊に多い。是れは日本より支那に渡つた僧侶が、一種崇拜の觀念より、彼地にて手に入れて持ち歸つたものとの解釋がつかぬ譯で無い。或は其他の墨蹟も、東山公などが態々支那から取寄せたとか、若くは支那から送られたなどいふ類のもの、少なくないであらう。併し其れにしても、却々多過ぎる程ある。交通不便の時代であつたことを考へると、是等のものが如何にして日本に渡り來つたかといふ不審を起さざるを得ぬ。

之に關して、偶々五井蘭洲の隨筆を讀んでみると、明の時代に、我が倭寇が盛に支那の東南諸國を侵略して、其の地方の豪族や、地位ある官吏等を屠り殺し、其の財物を掠奪した、其時に持歸つた書畫骨董は實に

夥しい數で、それが貴族、大名の家に傳はつて、其の豊富を致したものであると書いてあるが、是れは恐らく其の通りであらうと思はれる。尙ほ蘭洲は之に附加へて、其の掠奪した書畫のうちには、贖物が少なくないといふ云つて居るが、之れも當つて居ると思ふ。日本の諸家に藏されて居る宋、元の書畫には、事實贖物が非常に多い。是等を考へ合すれば、日本に存在する支那書畫の大部分は倭寇の持來つたものであるといふ解釋は、先づ間違の無いものと云つてよからう。自分は嘗て本誌に、日本の寶物は多くは泥棒の手にかゝつたものだといふ云つたことがあるが、是等も其の一例とすべきものである。

老若相敬

老人は若い者を輕んじ、若い者は又老人を、新らし味が無いと侮る、さういふ扞格は、いつの世にもあるもので、是れには勿論、色々の事情のあることだが、甚だ喜ばしからぬことだ。ある古い諺に、『若木の下には笠を脱げ』といふ言葉がある。是れは近頃はあまり云はれぬことだが、味ふて見れば、中々に意味の深い諺である。いふ迄もなく、若木といへば、僅か二尺か三尺の小さな木であるが、それが段々發育し、成長した曉には、亭々として雲を凌ぐ大木になるといふことに想ひ到れば、座ろに畏敬の念を催さざるを得ぬ。所謂大器晩成といふことを考へると、其の若い木の下に笠を脱いで、禮をするといふ心持も起つて來る譯である。斯様に若い人間を尊敬するのは當然のことで、近頃は、世の進むに従ひ、段々さういふ風になつて來たやうにも見える。即ち、此の諺は古く行はれたものであるけれども、何と無く近代味があるやうに思はれる。老人の若い者に對するには、常に此の心掛がありたいものである。

又、若い者が老人に對してはどうであるかといふに、老人は其の年輩の上から、若い者の

到底及ばぬ經驗を積んで、所謂老熟の域に達して居るものである。若い者は之に對して、十分の尊敬を拂はねばならぬ。昔、高森昌允といふ人の歌に、

ねかはくは老いぬる今の心にて

はたち許りの身を得てしかな

といふのがある。是は誠に面白い歌であると思ふ。全體、二十歳位迄の年頃には、殆んど是非の別も無く、たゞ面白く、楽しいこと許り考へて、夢心地に過すの

が普通であつて、其爲め或は病氣を起したり、身を誤まつたりすることになる。老いては初めて處世に練達して來て、何事にも巧者になつて來る。此の練達した心持で、もし其の身體が二十許りであつたならば、如何に面白く又楽しくもあることであらう。併しながら、儘ならぬが世の常で、斯様に心持の老熟した時には、もはや一歩々々墓場に近づいて居る。いかに物事に巧者であつても、もはや大きな仕事を企てることも

出來ず、大抵の人は其處で萬事を控目にするやうになる。老人の此の心持を、若い人が會得したならば、第一過ちも少なく、又其の前途も長い。所謂成功の秘訣も亦茲にあると思ふ。兎角、若い人は此の意味に於て

老人に敬意を拂ひ、又此の歌を味はつて、老境に至らぬ中に、此の歌の教へる如き心掛があつてほしいものである。



関

関取

西郷と小野川

市島 春城

小倉の木綿

西郷南洲といへば、何人も相撲取を聯想する程、偉大なる體格の持主であつたが、事實大變な相撲好きで、當時有名な小野川といふ關取を最も最負にして居た。或る兩國の晴れの場所に、此の小野川が全勝を得たことがある。其時西郷は大に喜び、天下無双の四大字を揮毫して、之を小野川に與へた。小野川辱く拜受して、西郷に向ひ、是は洵に有難い頂戴物、永く家の寶に致します、就ては甚だ恐入つた御願ではあるが、貴方の御身體につけられた著古しの浴衣でも、編絆でも頂戴仰付けられたいと頼み入つた。西郷、其んなものを何にするのかと聞くと、之を額に仕立てるに就て、貴方の御身に附いた裂を用ゐたいといふので、成程と思ひ、それならば之れを遣らうと云つて、其時着用して居た袴を、見る／＼ビリ／＼と引裂き、**其の半分程を投出して、小野川に與へた。小野川押し戴いて家に歸り、直に之を表装裂にして、天下無双の大字を額に仕立て、大切に保存して居たといふ。**何れ其の袴は小倉の粗末なものであつたらうが、**之れを無造作に引裂いて與へたといふのも西郷らしく、又之を額の表装に用ゐた小野川の思付も面白い。**此の額、今は望月圭介といふ代議士の家にある由

表装裂は、その用へたといふ

西郷

俗 雅

望月圭介が有る

で、しかも其の表装裂がいつの間にか變つて、立派に金装にされて居るさうだが、惜しいものである。矢張り初の通り、西郷の着用して居た粗末な袴地が表装になつて居る方が、別に趣味のあつたこと、思はれる。

ハハハハ

不受不施

日蓮宗に不受不施といふ一派があつた。多分今でも
あるであらう。其の起りは、文祿年間に、京都の妙覺
寺の住職日奥といふ人が主唱したもので、法華信者以
外の者から施物を受けてはならぬ、それと同様に、他
宗の者にも施してはならぬといふ一種の信條から成立
つたものである。かゝる窮窶な信條は、動もすれば
時の爲政家を手古摺らせた。豊太閤が大佛殿の供養を
した際、此の日奥にも出席するやう案内したが、其れ
を断はつて、何としても出て來ぬので、流石の太閤も
大に弱つたといふ。徳川期に入つても、同じやうな事
で、大分幕府を困らせたことがある。其の一例をいふ
と、四代將軍綱吉は大に能樂を好んだが、當時有名な
能役者に春藤六右衛門といふ者あり、二人の子があ
つて、長男を六左衛門、次男を六郎次郎と呼んだ。此
の次男の六郎次郎は、將軍家の近習に召出されて、名
を齋藤新八郎と改め、頗る寵愛を受けて居たが、茲に
或る時、妙な事が起つた。といふのは、徳川家では毎
年二月一日、日光にて、お鏡餅頂戴の式といふものを

道

かあつた。

研究の結果

能役者の結果寫樂の先代

行ふことになつて居る。是は幕府には最も大切
な禮式で、極めて莊嚴に行はれ、其席に招かる、者
は、何人も之を光榮としたものであるが、齋藤新八郎
は、日蓮宗の不受不施派に屬して居た爲め、此のお
鏡餅の席に列することを肯んせなかつた。其れは此の
席に列なつた者には、日光の廟に捧げた鏡餅を分與せ
られることになつて居るのであるが、其れを貰つては
宗派の信條に障るといふので、出席を拒んだのである。
其爲め新八郎初め、父の六右衛門も、兄の六左衛門も
皆八丈島へ流されるといふやうな椿事が起つた。是れ
は一面に於て、宗教上の信條が如何に強く人心を支配
するものであるかといふことを語るもので、其んな出
來事のあつた爲め、幕府は遂に此の不受不施派を禁じ
てしまつた。

儀

の後の

譯の

かたがた

卓(采)其の特徴を發揮したの
得て、神彩躍如たるの妙がある。當時の浮世畫家は、
役者畫を描くに當つて、多くは實物よりも之を美化し、
自然役者に媚びることを免がれなかつたのに、寫樂一
人が屹然として、故らに婉媚の筆を弄すること無く、
其の爲め役者の憎怨を買つたといふ説さへある。斯様
のひねくれ者がぼつとりと現はれ出でた其の源流を尋
ねてみると、彼が祖先は不受不施派に屬して、其の信
仰を守る爲めに、流刑に處せられた程の熱心な信者で
あつた。受けず、施さず、極度に自己を立て通した者の
子孫に、寫樂の如き人物の出たといふのも、偶然で無
いやうに思はれる。

鳥獸の自然療法

天地間には自然の妙法があつて、鳥か、獸かの
類が、毒に襲はれたり、病を得たりした場合には、之
を自然に治療する法を心得て居る。是れは蓋し其の本
能の自ら然らしむる所であらう。西洋の書物には、是
等の事が多く出て居るが、古く日本の漢方醫などの書
いたもの、内にも、其の實例の語られて居るものが少
なくない。小川禮齋の換杏新話といふ隨筆を見ると、

燕の糞が魚の毒を解くといふ所に、文化のある年、豆
州の三津長濱といふ濱邊に、河豚が多く集まつた。そ
こで、村の漁師が之を取つて、砂の上へ山の如く積み
上げて置いた。丁度其頃は、梅雨の季節であつたが、
不思議な事に、鳶や鳥が頻りに其の邊りを舞ふて、民
家に巢くふて居る燕を掴み殺しては、盛んに之れを食
ふて居る。それを見た竹田玄順といふ醫者は、燕の
糞が魚の毒を解くものであるといふことを知つて居
たので、斯様に鳶や鳥が燕を殺すのは、必ず河豚を
食ひ過ぎて、其の毒を去る爲めであらうと思ひ、調べ
てみると、果して其の通りであつたといふて居る。又
鼠の毒と鼠を書いてある處に、若州小濱の藩士某
といふ者、鼠を大層愛して、之を飼つて置いた。處が
其の鼠が狂病に罹つて、愛して居る主人を噛んだ爲め、
忽ち主人は大熱を發して、殆んど死せんとするやうな
場合に立到つた。其時鼠は飼はれて居た箱を噛み破つ
て庭に走り出で、朝顔の莖と葉とを啣へ來て、其の主
人の枕許に置いて去つた。傍らに看護して居た者が之
を見て、何か意味のあることだらうと思ひ、試みに其
の鼠の持つて來たものを煎じて飲ませた處、主人の病

の養



地震の前徴

災後のバラック書店を訪ふて『地震考』一冊を得た。是れは珍らしい書物で、巻首に岸岳の繪あり、巻末には貫名海屋の漢文の跋あり、文政十三年京都の地震を經として餘震の頻々たるを説明したもので、濤山筆記とある。いつの世にも餘震を恐れたることは、此書を見ても明らかである。著者曰く、地震は初め強く、風は中頃強く、雷は末強きものなりと。いかにも其の通りである。此の巻中に伊豆の松崎村の古寺院より發見したといふ建久九年の曆の巻首の圖を載せてある。それは妙な蟲を描いて之れに日本全土の國名を記したも

小精廬雜話 (二)

市 島 春 城

ので、鎌倉時代には地震は怪蟲の仕業であると信じたのである。鯨の仕業であるとの迷信もかなり古いものだ。地震の古き和名を『なみ』といふのは誰も知つて居るが、加茂季鷹は『な』を魚と解し、『なみふる』は魚の震ふのであると説いた。佐渡にては地震を『なみふる』と言ひならはし、地震と云つても通せないと記してある。地震の前徴について色々の記事ある中に、享和三年佐渡の地震についての記事があるから、それを抜抄しやう。

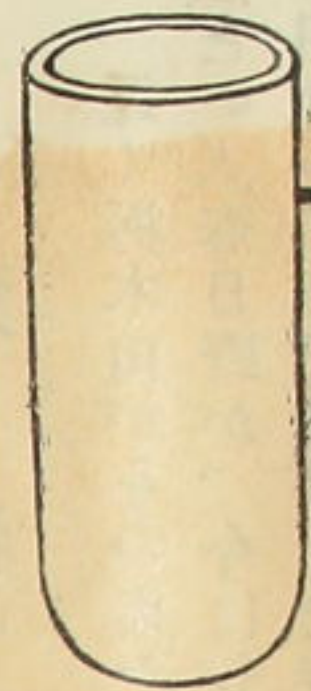
廣島氏の譚に享和三年十一月所用ありて佐渡の國小木といふ港に滞留せしに、同十五日の朝なりしが、同宿の船が、りせし船頭と共に日和を見んとて近邊

は追々恢復に向つて來たといふ話が載せられてある。又同じやうな事が、蛇の毒といふ條にある。薩摩の伊勢梅雪といふ人の話に、琉球にはハブといふ蛇が居るが、此の蛇は人語を解すといはれて居る。琉球の土人は此の蛇を飼ひ、之を入口に置いて、盜賊の番をさせる。ある夜、夜更けて家に歸つて來たが、暗中のハブは主人を賊と誤まり、之れを刺した。是れ亦非常の毒氣を感じて、殆んど一命も危き程の危急の場合に迫つた。其時ハブは一種の草を口に啣へ來り、恰かも自分の過失を謝するが如き態度で、之れを病床近くに置いた。そこで家族も、故こそあらんと、其草を揉み碎いて、刺された患部に附けた處、忽然として痛みが止まつて、段々に恢復したといふ。此草は今、世に傳へてハブ草と唱へられるものであらう。本草家も、此草は蛇毒を解するものといふて居る。斯様に下等動物が、毒を解き、病を治する自然の方法を知つて居る例は、東西共に甚だ多い。

主人が

なる丘へ出でしに、船頭のいはく、今日の天氣は誠にあやしげなり、四方濛々として雲、山の腰にたれ、山、半腹より上は峰あらはれたり、雨とも見えず、風になるとも覺えず、我年來かくのごとき天氣を見ずと大にあやしむ。此時廣島氏若へて曰く、是は雲のたるゝにあらず、地氣の上昇するならん、今幼年の時父に聞けることには、地氣の上昇するは地震の徴なりと、暫時も猶豫あるべからずと急ぎ旅宿に歸り、主じに其由を告げ、此地後ろは山、前は海にして甚だ危し、又來るとも暫時外の地にのがれんと人をして荷物など先へ送らせ、そこへに支度して立出でぬ。道の程四里計りも行くと思ひしが、山中にて果して大地震せり。地は浪のうつが如く揺れて大木など枝みな地に打ふし、まろびながら漸くにのがれて去りぬ。此時小木の港は山崩れ、堂塔は倒れ、潮漲りて今屋みな海に入り、大きな岩海より涌出でたり。それより毎日小動して翌年二月に漸く止みたりとなん。其後同國金山に到りし時、去る地震には定めし穴も潰れ、人も損せしにやと問ひしに、さはなくて皆いふ、此地は昔より地震は已前に知りぬ、

去る地震も三日以前に其徴を知りて、皆穴に入らず用意せし故一人も怪我なしとなり。其徴はいかにして知るやと問ひしに、將に地震せんとする前は穴の中地氣上昇して傍なる人も互に腰より上は唯濛々として見えず、之を地震の徴とすといへり、云々。常には顧みもせぬ書も、今のやうな場合には讀んで多少の興味を感ずる。佐渡は渡船のため直覺に天候を知る舟夫のあることは隠れも無いことであるが、鑛山の坑夫が地震を前知するの事實は此書に依つて初めて知つた。



昔し高貴の人々の行列に加はり、鹵簿堂々と練り行く際には、今とは違つて随分長い時間を要したもので、其場合に騎馬の人も、或は駕などに乗つて居る者も、動もすれば途中小便を催すことがある。其爲に行列を外すことが絶對に出来なかつたのはいふ迄も無いが、其れには矢張り相應の道具があつた。シト筒といふのが即ちそれで、シトは小便の古語である。其の形は圖に示せる如くであつて、極めて身分の低い家來が腰に下げて居り、用便の場合に之れを主人に進めたものである。是れは木で作つたものもあり、皮にて拵へられたものもあつた。又駕などの場合には、シト筒の外に一種の工夫があつて、中にて用便すれば自ら外部に流れ出るやうに仕掛けられてあるものもあつた。

野崎武吉郎氏

○中國に旅行する度に名聲依然として隆々たるものは野崎武吉郎氏である。君は帝國議會の創設當時より多額納税者として屢次貴族院議員に擧げられた人である。自分は兩三年前備中に遊んだ時に其人に逢ふの機會を得た。

○君の居は岡山縣の倉敷を距る事三里計りの海濱で味野と云ふ所である。自分は野崎氏に懇親なる二三の方面より添書を携へて行つた譯であるが、行つて見ると如何にも堂々たる大家で主人は折節別荘の方に居ると云ふ事でも留守であつたが兎に角通れと云ふ事で、客間へ通つて見ると家人の挨拶振り接待の様子などが極めて物馴れて懇切である處から、先以て主人の風格が推量せらるゝ。

○須臾して別荘の方から電話が來たと云ふ譯で別荘へ行つて見ると、それは同じい市中で僅かに二三町隔つてゐるのみで茲に初めて主人と會見を遂げた。主人は六十からまりの人であるが如何にも體格のよい風采の温雅な人で、人に接するや極めて懇切に極めて謙遜過るので却々此方が開口する位であつた事は、別荘へ行く時刻を見計つて門前に主人自ら迎へて居られた一例でも判る。

○主人は切りに一泊を勧められるので其親切にほだされて、まだ日も高く且つ旅宿も遠からぬにも拘はらず宿の事となつた。此別荘は近年の經營に係るものらしく極めて新しく見受けた、庭は海濱に相應する式の結構で、手廣い處を一面に白沙を布き一面に青松を栽を石を程よくあしらふの神殆ど何物をも交へず、庭を隔てと海を望み、白沙青松の間白鶴五六遊んでゐると云ふ一種海濱趣味の庭であつた。聽て晚餐の時刻になつて主人が案内せられたのは百疊敷とも云ふべき廣い席で、自分は其高座に据えられ、主人初め一家の眷族中の男子五六人が陪席したので、自分は俄かに大名にでもなつた如き心地がした。

○切て大名の氣持もよいが茲に一つ當惑した事があつた。元來主人公は非常の豪酒家で、客を愛し之と共に置酒高會の興を遣るを以て無上の樂事となすと云ふ事は兼て自分の耳にして居る處だ。嘗ては随分酒量の大なる身であつたものと、十

年前計り禁酒をして居る自分は、斯の如き豪酒家に招かれ殆ど大酒が飲つて如き席に臨んで酒を辭すると云ふ事が出来るか出来ぬかと云ふ事を先づ考へた。自分も曾て飲むだ時代には折角人を招いて其主賓が酒を一杯も飲めぬと云ふ場合は不興のものであつた、今其情を主人に移して見ると恐く不興であらう、折角の十年の禁を破るは遺憾であるが此場合之程の饜應に對して自分の守る處を頑固に持したならば主人に對して甚だ氣の毒であるとも考へたので、いろ／＼苦悶の末遂に禁を破る事に決した。

○そこで主人が盃を持って來られた時に自分は、明に其所以で述べ、貴下の御款待に依て十年の禁を破りますと云つて盃を受けられた時に、主人は感激して座を退き厚く禮を言はれたのは我ながら可笑しく思はれた。併し酒家の情は斯う云ふ場合に頭を下げて禮を云ふ程同情あるものである。

初對面録

◎吉川泰次郎氏

○岩崎彌太郎の三菱時代に於ては東京の支店長として知られ、後吉佐移民會社長として知られた吉川泰次郎氏は土佐人で、土佐氣質の標本とも云ふべき人であつた。自分が此人を訪ねたのは今より廿年許り前、吉川の全盛時代であつた。○氏の邸宅は向島に在つたが自分は或る有力なる紹介状を持って初めて面會した。時は慥か秋の初めで餘り涼しくならぬ時であつたと思ふ。非常に肥大の人で衣類などもよく前が合はぬ位で、頗る寛濶の態度で例の土佐辯を操縦して如何にも客を外らさぬ調子と磊落豪放の氣風は、未だ多く語を交へざる中に知られた。要談が済むと折角來られたのであるから兎に

角語をして行けと云つて切りにもてなると自分で自分も其氣になると、其處は暑いからとて俄に庭に納涼臺を幾つか取寄せ、四角に合せて、其上に絨氈を敷かせ、臺の四方には陶製の榻を十ばかり圍むた處へ案内せられた。

○庭は千坪もあらうか頗る廣いものである、見渡す限り眞平な芝生で、只塙壁を掩ふ爲めの樹木がある他殆んど眼を遮るものがなく、一種面白い庭である。自分は主人公の性格を悟つたので案内に任せ、涼臺の上に乗ると綴子の蒲團があつて追々出て來る杯膳は全く大名式の蒔繪づくめの高膳で侍女が周圍の椅子に踞して酒を注ぐ團扇にて煽ぐ、また通信係とも云ふべき小間使もある、凡て十人計りの侍女がゴロリ取巻いた有様は如何にも堂々たるもので、其大名的態度は慥かに岩崎彌太郎の盛時を偲ばると趣きがある。○主人仲々の豪酒で且つ飲み且つ談ず、土佐の土音が勝つて居るので話は一寸よく聞取れぬが併し其言ふ所は仲々大きい主人仲々酒を勧むるに巧みで、其薫陶を

受け居る侍女等も如何にも勉強して酒を注ぐので圖らずも自分も興に入つた。酒間一天俄かに掻き曇りボツリ／＼雨を催して來た。主人は知らざるものと如く平然として且つ飲み且つ談ず、其中に雨愈々甚しきに至るや主人初めて氣付いた態度で急に侍女に命じて傘を持來らしめ之を主客兩人の背後から差懸せて猶自若として飲み且つ談ず、自分は大きに傘を懸して酒を飲むと云ふ事は臍の緒切つて初めての事で、一種の快感に打たれた。○斯くて倏忽の間今度は覆盆の大雨となつた、此に至つては追の主人も閉口せざるを得ない、自分を促して急に座敷に歸つた、自分はそれを機會に辭去せんとしたが主人仲々容さぬ、更らに飲更みやうと云ふ事で杯膳を座敷に移し更に飲み更に談ずる事前の如く、自分は屢次辭去せんとするも容さず、夜は更けて將に十時に垂んとす、玉山は既に傾き主客頗る酩酊の境に入つたが主人の興は未だ半だと云ふ様な譯だ、酒客の癖として酔ふに随ひ益々種々の食物が入用になつて來

年 月 日

楠本男ののり

楠本男曰く、自分が新潟縣令たりしは明治六年の夏頃で當時新潟は前年一揆の動亂の餘を受けて全國中難縣の稱ありし所であつた。自分は其時外務の大丞であつたが、自身の希望は外務官として洋行したいといふにあつた。然るに時の政府は新潟へ行くべき適任者

がないから、強て自分に行けと逼るのを、自分は度々辭退したけれども聞かれません。果は陛下より直に勅諭あるべしとまで逼るので、斯ありては畏れ多いとて不本意ながら往くとに決した。併し何分にも動亂の餘を受けて一の知人もない處へ行くところあるから頗る心許なく思ふて、政府に對して、自分に動亂を處する全權を與へて貰ひたいと云つた處が、政府の曰く、宜しい全權を與へる、唯死刑に相當する罪人の斷獄又は何へと云ふとて極まつた。

○そこで自分は、僕を擧へ、三國道中より越後へ向つたが當時道路極めて悪しく、駕籠さへ通ぜぬ所もあつた。或日自分は僕に先だちて或茶店に憩んで水を飲む間に、曹達を入れて二三杯傾けて去つた、すると後から僕が追付て云ふには「私は旦那様の御意になつた茶店で旦那様の事を尋ねました處が、茶店の亭主が驚いて申すには、アノ人

は清水を忽ち沸騰して熱湯にしたが、アレは魔法に相違ないと申しました」と話したので大に興に入つたが、當時の状態は全く斯んなものであつた。

○扱て愈々任地へ到着して看れば、動亂後の人心尙ほ惴々として何等の施設もなく、例へば當時各所に行はれつゝあつた大小區の行政區劃すらも尙ほ設けられず、依然として大名主の配下に在つた程である。是に於て自分は改革に着手するに先だち、普く各部の人才を會した。其數は十五六名で三嶋億次郎、室孝次郎の如きも其中にあつた。自分はこれ等の人々に就て仔細に縣下の事情を叩き、遂に大名主を廢し財政に就ては今日の所謂豫算會議を起し、民會を興し税法を定め、其他未だ緒に就かざる改革をソロソロ初めたが、當時の税法は雷だ般に課するのみにて其他に課せないので、隨て貨幣を持て居る金持は自ら

課税を免かるゝ偏頗の現象を呈するに至つたので、是では困ると思つて、穀七戸二の課税法を定めた。蓋し戸數割の制を立てたるは實に新潟縣が始めてある。其後越後の地勢が二縣に分割するを不可と見るや、柏崎縣を廢して直に縣廳を入札拂となしたるには、縣民も痛く驚ろきたる様子であつた。

○楠本男曰く、元來自分は外務省に居たものだから割合に外國の事情をよく知て居つた。去れば銀行を設けなければならぬと思ふて縣の富豪を勸誘した處が、當時未だ銀行の何たるを知らぬもの多く、二十萬の金は楠本へ獻金すると云ふて銀行も出來た。また既に一縣の下に置かねばならぬとする以上は、鐵道の便もなくは叶ふまいと思ふて信越鐵道の必要を室其他へ説いたのも自分である。時の



工部卿佐々木高行(故侯爵)は自分が別戀の人であつたから、自分はこれに就て屢々私設の許可を得やうと思ふて求めたが、政府の私設を許さぬ方針なものだから、然らば己を得ないが、併し他日必ず官設にするやうにと談判し堅く約束させたのも自分である。

○斷髮の令は格別大問題でもないけれども、越後の如き動もすれば一揆騒動を醸し易い所では、先づ人心を一新せしめなければならぬ、人心を一新せしめるには頭容を變ぜしむる杯一手段だと信じて行つた譯である。當時士族の輩などは未だ帶刀して居る頃であつたから、斷髮廢刀を勸誘するには随分困難で、殊に高田の士族を説服するに最も骨が折れた。高田の舊士族が自分の寓所へ訪ねて來た時には、自分は恰かも風呂へ入つて居たが、數十の士族が上下帶刀で客間に待つて居るとの、宿の亭主の報知で、自分は微笑し故ら浴

衣の儘で客間へ來て、連中の中間に座し挨拶をし、それから舌戰半日に渉るも彼等屈せず、午前一時に至りて彼等初めて時勢に感じたりしく納付して引取つたが、翌朝は昔一同斷髮無刀で謝禮に來た時は、自分も頗る愉快であつた。兎も角當時自分は我ながら勉強したるもの、又諸般の改革も自分がやつてから立派になつた譯だ。

前島男の疾行

書便
 稱するも夜は長
 にて 木舌



◎それから男が當時の有様に就て話された中には斯う云ふともある。それは矢張り明治政府になつてからのとて、時の政府から外國へ金を渡さなければならぬとが切迫した。何でも砲の代金か何かで僅か二三萬の端金であつた處が新世帯の明治政府には一萬の金さへ調達が出来ぬと云ふ譯だ。そこで江戸城の大書院に徳川家の古い調度、寶



物類を何千點も陳列して、市中の商人共を呼寄せ羅を遣わし、何分三百年間天下を掌握した將軍家の財寶であるから、現今より見れば一點にても數萬金に上るが如き美術品等もあり、千圓や二千圓位のもはザラにあつたにも拘はらず、漸く一萬か二萬の金にしかならなかつたと云ふとてある

私の故人

◎紅葉と最後の晩餐

尾崎紅葉の没したの日は昨日の如く思ふて
も、内々、数れば十年でも程近きまつ
の、自分は紅葉とは頗る親密にして居た
が、紅葉に就て語るべき事は多々ある
が、併し大部分の事は後日として今日は
紅葉と最後の晩餐をやつた時の模様を記
して置いたものがあるからそれを語らば
見やう。明治三十六年四月七日、紅葉と
共に高田半峰に招かれて、午後三時頃往
つて晩餐の饗を受けた。此日招待を受け
て會したものは、自分と紅葉の外、坪内
逍遙、角田竹冷、長田秋濤、梶田半古、武内
桂舟の五名で、主客を合し八名の會合で
あつた。この會合は紅葉の病氣を慰むる
ため催されたので、會客は特に紅葉の親

別懇
の夢の
色

友を選んだのである。逍遙は其前月顔面
神經に罹つて居たが、最早回復して顔面
のユガミも大方癒つて居た。紅葉は幾
許衰弱の様子ありし。元氣はなかく
盛んで、それが命が數ヶ月さへ持たぬと
は醫者が吾れを欺くのではあるまいかと
思はるとほどであつた。

俳人が二人集まつた上に畫家が二人來會
はしたのであるから、席書が始まつて、
紅、絹や短冊手當り次第十數枚を書き
散らした。自分にも半古が水仙を畫いた

上に『はつ冬や髪そりたてのおとこふり』
と云ふ句を書いて呉れた、又他に一枚『
たれこめて花に物縫ふ世帯哉』と云ふを
も書いて呉れた。自分は更らに畫帖を出
して、桂舟、半古に畫を乞ひしに、半古は
燕子花、桂舟は辨慶勸進帳を畫かき、紅
葉は病中の作なりとて『目を閉ちて嗚呼
われ花につかれたり』の一句を書いて呉
れたが、いづれもいつもよりよく出來た
併しこれが恐らく絶筆であらうと思ふと
潜然たらざるを得ないのである。

氏山人の癖の人
与和日

◎食事と食物談

漸く時刻移つて各々膳に就いたが、紅葉
は醫戒なりとて葡萄酒、鶏卵、牛肉の外少
量の汁と米飯を口にしたのみで、來客七
名の内、長田の外は皆な大の下戸にて、
桂舟、竹冷のどとき菓子で胸をわるくし
たのをしる粉でなほす程の勇あれども、
酒は一滴もゆかぬと云ふ弱武者、酒なれ
ば人後に落ちざりし自分も今は一滴も口
にする能はずと云ふ次第にて、一座は爲
めに白けて見えた。併し懇意同士の間と
て、例の冗談は湧くが如く起つた。紅葉
はあんものど鯉が食ひたいと啣ち、自分
は惣菜のよく調理したのが最も甘いと主
張し、高田は油揚が旨いと氣焰を吐き、
桂舟は筍子を主張し、竹冷はいるかの調
理法を云々するなど、食もの談に持ち切
つたは、眞逆今日の主賓紅葉が食ひもの
ために不治の患を醸したと云ふ因縁か
らでもあるまいかと、自分は一笑を洩ら
した。之れが自分と紅葉との最後の晩餐
であつた。

八表

日に没した、時に八十一歳。老後は浴
北鷹が峯に隠れし太虚庵、又徳友齋と
も言つた。没後一字を建て光悦寺と名
け其邊を光悦町と呼んだ。
光悦の父、光二は、文明の頃、京都
の所司代であつた多賀豊後守中原高忠
の二男片岡次大夫の長子と生れた、然
るに、本阿彌七世光心に最初男の子が
無かつたから、次大夫の妻に五世妙壽
の妹に當る關係からして、光心は光二
を養つて子とし之を次郎左衛門と呼び
己が職を嗣がせた、其後に光心の實子
に光利が生れたから、光二は自ら別家
を立、本家の名跡をば光利に嗣がせた、之
が本阿彌の家を別けた始である。元來
本阿彌の始祖妙本は菅家五條高長卿老
年の庶子と生、刀劍鑿識を業とし嗜ん
だ事が原因となり、初て儒家を出で、
武弁となり、刀劍古今鍛冶の巧拙利鈍
を識別した、其子本妙、其子妙大、其
子妙秀其子妙壽皆業を嗣いだ。
そのかみ、十八人の剃髮せしものを何
阿彌陀佛、某阿彌陀佛と言つた。され
ば妙本も最初妙本阿彌陀佛と言つた
のを下略して妙本阿彌と言ひ兒孫は其
の上下を省いて苗氏とし本阿彌某と稱

した、九代目の光徳が、慶長のはじめ
に豊公の命により、始めて刀劍に極折
紙の規則を成し、其頃豊公から賜つた
銅印(即ち極折紙札の裏面に捺す)が今
に傳へて宗家に存する。
光二が光心の實子、光利に家を譲り
嗣がせて己は別家したる事を光利は感
じ思ひ、就て我が長女を光二の長男な
る光悦に娶せ、又光悦の妹をば己が
子の光徳に娶つた、光悦は若くして其
妻を失ひ後再び娶らなかつた。
光悦は其本職たる刀劍鑿識は云ふも
更らなり、書、畫、茶、陶の業にさへ長
じ、且つ光徳が子光實の後見をした事
もあるので、世には光悦も宗家歴代
の内に數ふる者もある、光徳は伯父た
る光悦に學び、其書体が能く似通へる



△光悦の遺蹟 (4)

所より、世間では、光徳が成した極折
紙を光悦が書いたものと思ひ誤つたら
しい。
光悦が父の光二は、總見院右府公に
も親しませ玉ひ、又東照神君の未だ幼
くて今川義元の許に在せし頃より親し
く見えて居た、光徳公が、越の府中に
在せし頃から食知を賜はり、其子光悦
其子光瑛に至り、二百石を賜つたとあ
る。元來光悦は早く妻を失ひ、以後獨
身で終つたから子がなく、我が徒弟の
光瑛を養つて子とした。然るに、光悦
は八十一歳の長命、光瑛は六十歳で没
したから、兩人共同し寛永十四年に此
世を去つた、但し光悦は二月三日、光
瑛は七月五日である。光瑛の子光甫は
天和四年七月廿四日没した。光甫が長
男光傳は父の食知三百石を賜はり、微
妙公に仕へてお覺え目出度かつた、其
子孫は今も家名を保つて榮えて居る。
以上は光悦の略歴である。
雅談愈々雅に、芳醇俗塵を洗ひ去つ
て此處身外身内一塵を止めず、感興益
す加つた。私は同行の石木曉海氏を願
みて「君の如き藝術家は、月に一度は
此寺に遊ぶ事としたら、精神上に得

▲山田一郎の金策 余は起つて發起人
の勞を謝し、且一つ勸議を起し、莫く
は名々立つて二十年前の失策談をしや
うとて、先づ愧より初めて曰く、山田
一郎と共に一夕品川に遊び、酔覺めて
後齋中の空乏なるに、ハタと困却した

が、山一の一策ありと言ふに任せて、
余一人品川に留まつた翌日夕刻に至つ
て山一再訪始めて身受けせられたが、
減多に金といふものを持つたことな
い山一が、如何にして金策をして來た
のか分らず。鬼に角も其のまゝ品川を
去つたが、新橋に來るに及んで、彼れ
は更らに一樓に登つて豪興を試みやう
といふので、益々怪しんで其の金策の
次第を問ふた處、彼れは暑中休暇で學
生一同が、學校から拜領の夜具布圍を
寢室に投げたまふ歸省したのを幸ひと
し、質屋と談判して、五六台の荷車を
持ち來らせ、三十圓の金を調達して來
たのだといふことが分明して、互に一
笑したと謂つて、大に明采を博した。
そして余の勸議は一同の賛成する所と
なりて、何れも交々立つて、過去の失
敗談を語り出した。その中には頗る振
つたのがある。

得して貰ひ度い。
 ▲山田一郎の放胆 品川の遊廓に遊んで、居つゞけをしたなども、其だ如何はしい話ではあるが、之れも昔の學生の狀態を知るには、多少面白い話であると思ふ。殊に山田一郎といふ小心翼々の男が、思ひ切つて放胆の行動を取つたことは、よほど興味のある事實である。其頃の大學の門番は随分八釜しいものであつたが、山田が其れにも關はらず、質屋の車を何臺となく引つ張り入れ、夜具蒲團を山と積んで、堂々と之れを曳き出したなどは、山田の逸話としても、面白いとであらうと思ふ。
 ▲九段の古戦場 此頃の大学生中には藝者を揚げて、酒を飲んで騒ぐことはしても、遊廓などへ足を踏み入れるのを、屑よしとせぬものがあり、随つて吉原の所在地をさへ知らぬ者があつた此の會の席上に於て、赤井勇と、坪内

逍遙と、余の三人、一晚中市街をほつき廻つたといふ話が出たが、アレは斯うである、一夜何處かに飲んで、十二時頃に其處を出たが、此れから吉原へ遊ぶのも面白くないし、宿へ歸つた處で、閉め出しを食つてしまふといふ處

△文政時代の落書
 文字は使ひ方に依つて俗を雅とし意外な味ひを出すものである。例へば「福は内鬼は外」の如き俗な言葉でも文字の選び方に依つては意外な面白味を生ずる、文政の頃にはいろ／＼の落書を蒐めた物の内に福は内鬼は外を左の如く書いたのがある
 富久者有知 遠仁者疎徳
 即ち富久しければ知有り、仁に遠ざかれば徳を疎んずと訓ませるのだ。

△硯卵
 文那の貴人の服飾に硯器がいろ／＼用ひられて居て、中には一人の解し兼ねるものもある、
 硯器の形も大きさも鶏卵の如き硯器もある、稀にある者である所から、人は珍として愛無して居るが、これが意外のものであることが貴族の古墳を発掘して分つた、此鶏卵形のものは死者の陰戸を塞ぐものであるハ盛装をして納棺するが、硯器は別段居る、但し死者に對する裝飾は別段の硯器がある。

いくつか
 邦 貴人の
 硯器を用ひる
 例として
 乃ち 埋骨するに
 ことか知れぬ。

二

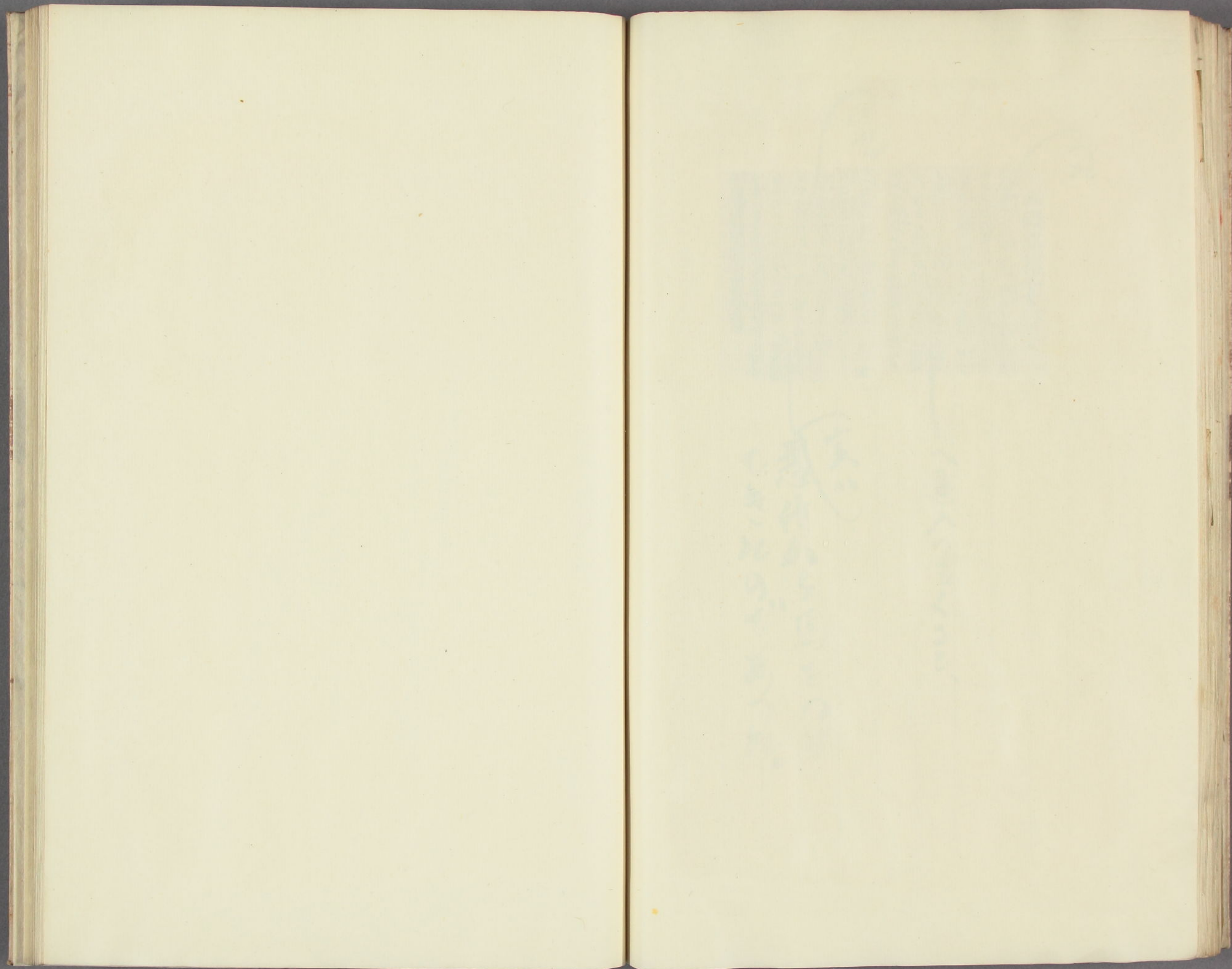
▲磯部博士の借金

磯部博士(四郎)は、酒脱で物に傾着せぬ人であるが、今の早稲田大學がまだ東京専門學校と云つた頃、博士も講師として教鞭を取つたことがある、或る日教壇を突然學生に「諸君の内、吾輩に金を三圓貸して呉れる

人はないか」と言ひ出した、此の意外の請求に學生も一寸面喰つたが、一人進み出で「私が所持して居ります」と用立てた、博士はそれを受取るにサツサと出て行つたが、

へ這入つてくこと、

「実が
悉所から馬をつけ
てき此のむあつね。



以下全て
白紙

